

平成 30 年度スポーツ庁

大学横断的かつ競技横断的統括組織（日本版NCAA）

創設事業（大学スポーツ振興の推進）

成果報告書

平成 31 年 3 月

東京国際大学

目 次

(1) スポーツ分野の統括業務の実施状況について	1
(2) 大学スポーツ・アドミニストレーターの配置の状況について	2
(3) 先進的モデル事業の実施状況について	4
強化クラブ総括	5
企画マーケティング総括	1 5
S E I 事業総括	2 7
(4) 今後の予定	5 7
(5) その他	6 1
アメリカ視察報告	6 2

東京国際大学が実施している平成30年度「大学横断的かつ競技横断的統括組織（日本版NCAA）創設事業」の実施状況を、ご指示の在りました方法・内容の項目（1）～（5）にて纏めましたので、以下にご報告いたします。

※より具体的な報告をするために使用した図、表、資料は、それぞれの項目ごと、特に「（3）先進的モデル事業の実施状況について」は、◎強化クラブ総括報告、◎企画マーケティング総括報告、◎SEI事業総括報告、のそれぞれにおいて、通し番号を付してありますので、ご確認下さい。

また、上記の3部門とは別に、アメリカの大学生世代のスポーツについて最新の情報を入手するためにアメリカのスポーツ教育機関の視察を実施しました。その報告書を巻末に掲載します。

（1）スポーツ分野の統括業務の実施状況について

i）組織の整備状況

事業の実施体制（大学内組織図）としては、**資料1**に示したように、大学の“強化クラブ”の総責任者である「理事長・総長」を頂点とし、「大学事務局（局長）」のサポートにより、「国際スポーツ推進機構長（学長）」が「国際スポーツ・アドミニストレーター：ISA(International Sports Administrator)」として、具体的な事業実施上の3総括である①強化クラブ総括、②企画マーケティング総括、③SEI(Sport and English Integration)事業総括を指揮する形になっている。また、3総括には、それぞれに「スポーツ・アドミニストレーター：SA(Sports Administrator)」を配置し、「理事長・総長」「大学事務局（局長）」「国際スポーツ推進機構長（学長）」からの指示に、適切にかつ素早く対応できるように、“ガバナンス”の強化を計っている。さらに、3総括には、それぞれの具体的な事業を実施する上で、その中心的な役割を果たす「シニアスタッフ：SS(Senior Staff)」と「スタッフ：S(Stuff)」を複数名配置し、その事業を実施・推進しながら、学生である「スチューデントスタッフ：SSA(Student Sports Administrator)」を教育し、将来の「国際スポーツ・アドミニストレーター（ISA）」や「スポーツ・アドミニストレーター（SA）」を育てる業務を担っている。「各強化クラブ（硬式野球部、サッカー部、ゴルフ部、駅伝部、女子サッカー部、女子ソフトボール部、硬式庭球部、ウエイトリフティング部、チアリーディング部、アメリカンフットボール部、アーチェリー部、剣道部、吹奏楽団）部長」は、それぞれの部活の監督・コーチ陣、主務、学生マネージャーと緊密に連携しながら、3総括が実施する事業に主体的・計画的に参画し、大学や今後展開されるユニバス（UNIVAS）の事実上の（最前線での）事業推進役を担い、今後の安全・安心で効果的・効率的な事業展開に必要とされるデータ収集にも積極的に協力する体制となっている。

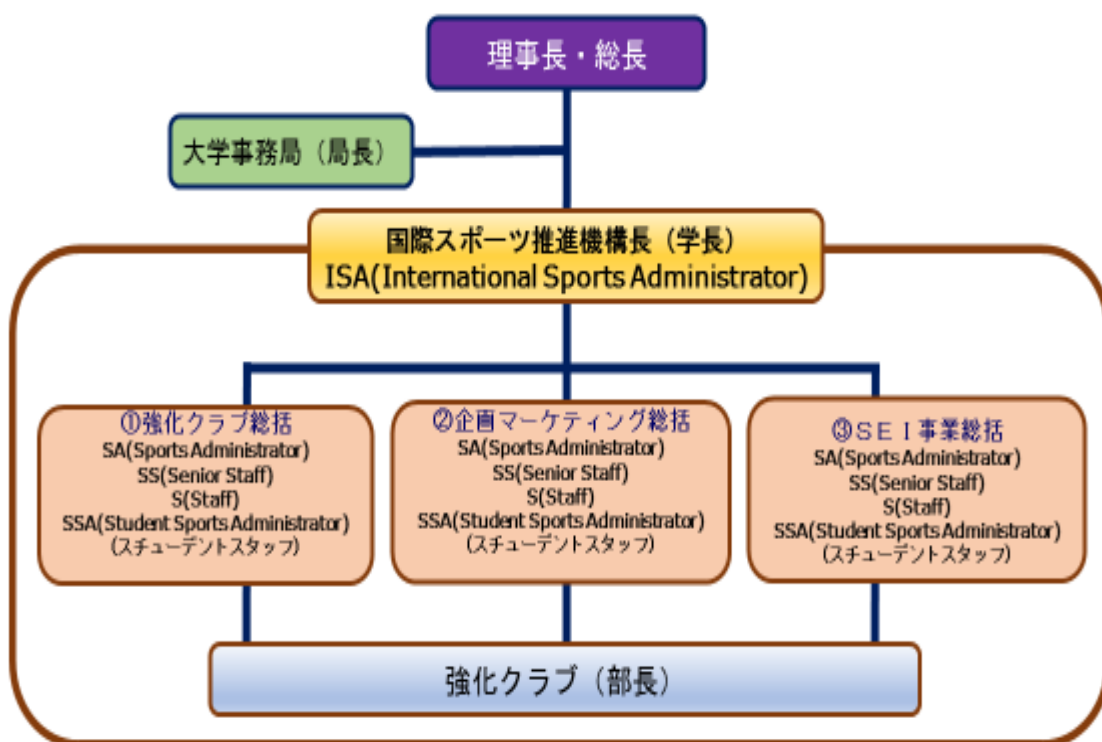
3総括の具体的な組織としては、**資料2**に示したように、各総括に1名のスポーツ・アドミニストレーター（SA）と1～2名のシニアスタッフ（SS）および複数名のスタッフ（S）が配置され、それぞれの総括で提案した各種の事業を精力的に実施中である。

(2) 大学スポーツ・アドミニストレーターの配置の状況について

3 総括（強化クラブ総括、企画マーケティング総括、SEI 事業総括）で担当するそれぞれの総括別役割を明確にし、シニアスタッフおよびスタッフと相談の上、長期目標である3～4年次の到達目標と中期目標である2～3年次の到達目標、および短期目標である1～2年次の到達目標を明確にしている。特に、短期目標においては、初年度内数ヶ月〔～2ヶ月（6～7月）、～6ヶ月（8～11）、～10ヶ月（12～翌年3月）〕の目標と評価および最終月（～12ヶ月）での振り返りを行い、次年度に向けての目標の再確認と再検討による修正を行うことになっている。（資料3）。

資料1～3

資料1 事業の実施体制（大学内組織図）



資料 2

① 強化クラブ総括

スポーツ・アドミニストレーター(SA)：空林 徹

シニアスタッフ(SS)：赤池行平、堀川昭子

スタッフ(S)：早川洋子、三好英次、山崎真之、一寸木洋平

- 1) 緊急時対応計画作成（早川、三好）
- 2) スポーツ医科学に基づく傷害予防（三好、一寸木）
- 3) 指導者の育成（早川、三好、山崎、一寸木）
- 4) 学生の学業成績管理（緊急時対応計画作成）（早川、山崎）

② 企画マーケティング総括

スポーツ・アドミニストレーター(SA)：碓井外幸

シニアスタッフ(SS)：田部井潤

スタッフ(S)：高田知和、上代圭子、梶田美奈子

- 1) 内部資源分析（高田）
- 2) 外部環境分析（高田、梶田）
- 3) 外部ステークホルダーとの接触（上代）
- 4) 事業の立案と企画（上代）
- 5) 事業の実施と評価（梶田）

③ SEI 事業総括

スポーツ・アドミニストレーター(SA)：碓井外幸

シニアスタッフ(SS)：麓 正樹、木原慎介

スタッフ(S)：布川清彦、鄭 志誠、阿部隆行、田中マキ子

- 1) 「英語科目」を担当するネイティブ教員との連絡調整、サポート（鄭）
- 2) 「スポーツ科目」を担当するスポーツ指導者との連絡調整、サポート（阿部、田中）
- 3) 両科目の統括的管理、サポート、その他（布川）
- 4) 受講者の修得度と意欲を指標とした成績評価の実施（鄭、阿部）
- 5) 次年度プログラム、ボランティア、イベントに向けた企画検討（布川、鄭、阿部、田中）

資料3 大学スポーツ振興の推進（東京国際大学の取組）

事業実施計画に沿った各部門の目標と評価（初年度）				
	目標と評価 （～2ヶ月）	目標と評価 （～6ヶ月）	目標と評価 （～10ヶ月）	振り返り （～12ヶ月）
強化クラブ総括	各部門の創設 ・組織メンバーの選定 ・連携体制の構築	課題の認識と施策立案 ・組織メンバー役割分担の 確認 ・各強化クラブの現状把握 ・緊急時対応計画実施 ・障害予防策の検討 ・学業成績管理体制の検討	障害予防策導入・指導者の再教育 学業管理体制の検討 ・到達必須成績管理基準検討	・部門の総括と連携 ・スポーツ推進部における総括 ・次年度へ向けての検討
企画マーケティング総括	各部門の創設 ・組織メンバーの選定 と役割分担の確認 ・連携体制の構築	組織整備とイベントの準備 ・強化クラブ財務状況管理 ・強化クラブの内部資源、 外部環境、ステーク ホルダーのニーズ把握	対外イベントの企画立案、実施そ して評価 ・対外イベント実施のためのマー ケティングミックス （企画立案）の作成、実施、評価	・イベントの実施と評価 ・次年度へ向けて の課題の検討
SEI事業総括	各部門の創設 ・組織メンバーの選定 と役割分担の確認 ・連携体制の構築	ISA育成講座立案と講座開始 ・ISA育成講座の立案、検討、 及び実施 ・学内における育成 スケジュールの策定	ISA育成講座の開始 ・ISA育成講座の実施と評価 ・地域との連携の検討	・部門の総括 ・次年度へ向けての検討

(3) 先進的モデル事業の実施状況について

3 総括（強化クラブ総括、企画マーケティング総括、SEI 事業総括）が実施した（実施中、未実施）の事業を、強化クラブ総括、企画マーケティング総括、SEI 事業総括の順に、以下で具体的に述べる。また、さらにその具体的なものは、資料として、それぞれの報告書の最後に添付する。

◎強化クラブ総括最終報告書

(スポーツ・アドミニストレーター：空林 徹、シニアスタッフ：赤池行平、堀川昭子)

本年度の事業計画

- ①緊急時対応計画
- ②傷害予防策の検討
- ③学業成績管理体制・到達必須成績管理基準

事業計画の実施状況

- ① 緊急時対応計画 ➡ 「実施済み」

各強化クラブ活動の「安全・安心」という要素の形式的な土台となる「緊急時対応計画」(資料1)は、各強化クラブの活動状況に沿った内容で作成された緊急時対応計画は、3月中に各クラブにおける複数の活動場所に掲示する。

- ② 傷害予防策の検討 ➡ 「実施済み」

現段階で何かの方策を導入するよりも現状把握が重要であるとの結論に達したため、アンケート実施を先ず優先して実施することに決定した(資料2-①・②)。指導者および選手むけの調査実施については、学内の強化クラブ活動スケジュールが多岐にわたるため全強化部一斉実施に向けた学内調整を継続中である。次年度に向けては、強化クラブごとのスケジュールにあわせ、可能な強化クラブから随時実施していくことを検討していく予定である。

- ③ 学業成績管理体制・到達必須成績管理基準 ➡ 「実施済み」

学業成績管理体制・到達必須成績管理基準については、強化クラブ監督やコーチ陣が関わること、学則改訂にも関わる事案であることから、今後も関係部門との検討を継続していく予定である。この学業成績管理基準に関する最終的な方向性が示された。結果をまとめたものを(資料3)として掲示する。

事業実施上の困難な点とその解決策

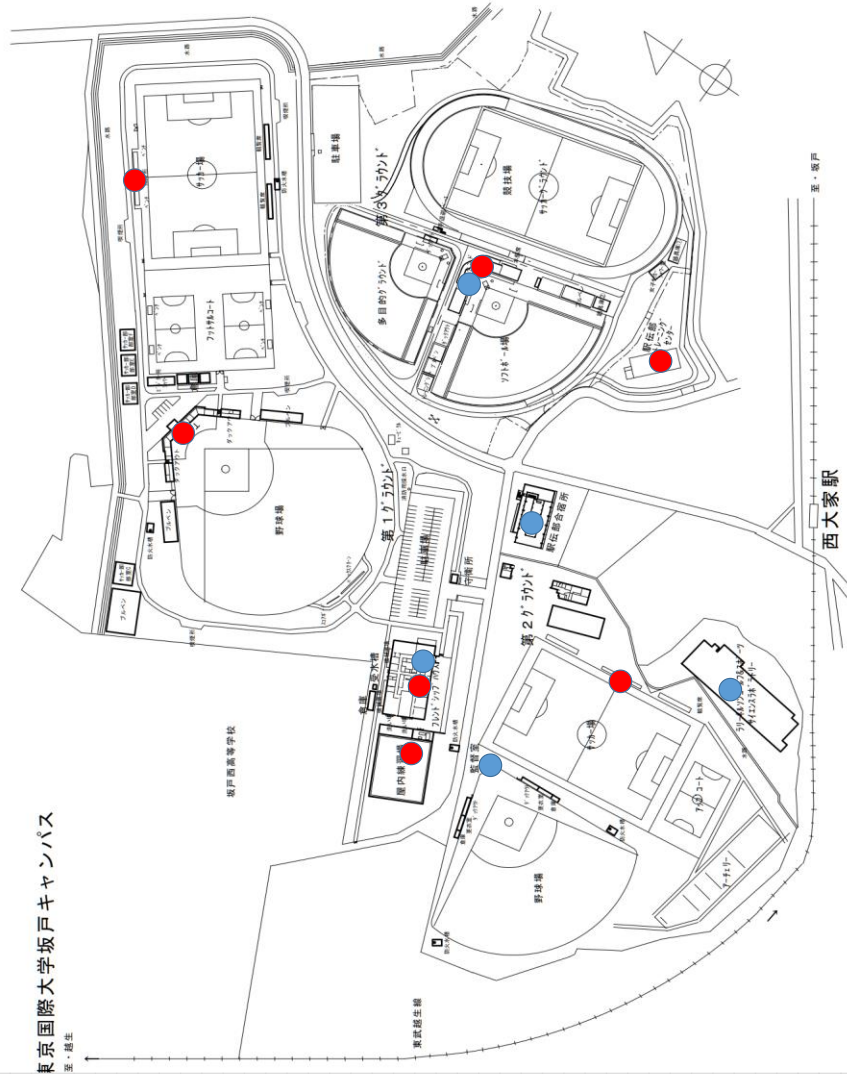
事業実施上の困難な点とその解決策については、(資料4)として報告する。

(資料1) 緊急時対応計画 (例)

緊急時行動計画	
<p>【事故または傷害発生】 (生命に危険のない状況)</p> <p>① スポーツ推進課に連絡する。応答が無い場合は部長に連絡を取る。 ② 求められた情報は全て提供する。 ③ 与えられた指示に従う。 (生命に危険がある状況)</p> <p>① 119番通報する。 ② 二次被害防止の為、救助者自身及び周囲の安全を確認し、周囲にも協力を求める。 ③ 患者の意識が無く、呼吸もしていない場合は、訓練を受けている者がいれば心臓蘇生法(CPR)を行う。AEDも直ちに用意する。 ④ 患者の状態を観察し、救急隊が到着するまで可能な応急処置を行う。 ⑤ スポーツ推進課に連絡する。応答が無い場合は部長に連絡を入れる。 ⑥ 到着した救急隊にできる限り知りえた情報を伝える。 ⑦ 携帯電話等で連絡のとれる成年が搬送先まで救急車に同乗し付き添う。</p>	<p>ければならない。また状況の安全確認がとれるまで、避難場所を指揮する。</p> <p>【重要な連絡先の電話番号】 救急:119</p> <p>構内警備担当(守衛室): 049-285-5520 (坂戸キャンパス守衛所) :内線: 8110</p> <p>スポーツ推進課: 049-285-5499 (坂戸キャンパス) :内線: 8101~8105</p> <p>近隣の病院 _____</p>
<p>【緊急時(地震、自然災害等)の建物からの避難】</p> <p>① 安全が確保できる場所に直ちに避難する。 ② 当日の活動を監督する立場にいる指導者は、全ての人が避難できてきているかどうか確認する責任を持つ。 ③ 障害者のある人、または避難できない人がいる場合には、119番に通報する際にその場所、人数、理由等を伝える。 ④ 当日の活動を監督する立場にいる指導者は、全ての人の避難状況を確認し、万が一負傷者等があればその状況、搬送先等の情報を把握する責任を持たなければならない。</p>	<p>【硬式野球部】 部長: _____ 監督: _____ コーチ: _____ コーチ: _____ コーチ: _____ トレーナー: _____</p> <p>スポーツ推進部 1C:049-277-5940 2C:049-277-5842 坂戸 C:049-285-5499</p>
<p>【火災】</p> <p>① 煙または炎が検知された場合、現場を確認し、必要であれば直ちに119番通報する。 ② 周囲に火災の発生を知らせ、直ちに危険な建物から避難するよう呼びかける。 ③ スポーツ推進課に連絡する。応答が無い場合は部長に連絡を入れる。</p>	<p>最終作成日 2019年2月27日</p>
<p>【犯罪対策】</p> <p>① 疑わしい行動を目撃した場合、構内警備担当に連絡。その後スポーツ推進課に連絡を入れる。 ② 可能であれば、人物の特徴(年齢、性別、服装、髪型、体型等)と行動の詳細を書きとる。 ③ 疑わしい行動、もしくは犯罪を、自分自身で解決しようとしてならない。</p>	<p>【突風・竜巻・雷】 ...突風、竜巻、雷が発生する可能性が認識された場合... ① ネットなどのメディア媒体から、天候確認のための情報を得る。 ② 情報が無い場合でも、その兆候を認識した時点で、現状で強固な構造物の内部に避難、誘導する。 ③ 当日の活動を監督する立場にいる指導者は、全ての人の避難状況を確認する責任を持たな</p>

東京国際大学坂戸キャンパス

至・学生



キャンパス	設置場所
坂戸キャンパス	第3パルクスタンド医務室 (遠征隊執行)
坂戸キャンパス	第一野球場野球場マネージャー室
坂戸キャンパス	第一サッカー場 指揮所
坂戸キャンパス	硬式室内練習所
坂戸キャンパス	第二サッカー場 指揮所
坂戸キャンパス	フレンドシップハウス医務室
坂戸キャンパス	駅伝部トレーニングセンター
坂戸キャンパス	ゴルフ練習場事務室
坂戸キャンパス	フレンドシップハウス事務室
坂戸キャンパス	第二野球場監督室
坂戸キャンパス	第三グラウンドパルクスタンド玄関

(資料2-①) 選手のコンディショニングに関する調査〈指導者用〉

クラブ名 () 部

1. 選手の体調管理に関する下記の要素のうちで、外部からの協力を必要とするものを選んでください。

- (1) 身体的強化トレーニング・補強トレーニングに関すること
- (2) 栄養・食事に関する指導
- (3) 精神面のサポート・メンタルトレーニングに関すること
- (4) その他

2. 上記1の回答に関して、必要とする具体的な内容を、考えている範囲でお書きください。

3. その他、選手の強化・管理に関して、何かお困りのことがあったらお書きください。

※ 裏面使用可

ありがとうございました。

(資料 2-②) 傷害予防に関するアンケート調査<学生用>

運動部活動名 () ポジション ()
 学籍番号・氏名 () 男・女

1. 大学入学後に受けた傷害(外傷/障害)がありますか?

※傷害(外傷/傷害)とは、「所属クラブの指導者に申告し、医師の診断を受けたもの」とします。

※高校時代の傷害は対象外です。あくまで大学入学後に発生したものに限りです。

ただし、一旦治癒したものの、大学入学後に再発または悪化したものは対象とします。

1) あり 質問 2、3、4へ 2)、なし 質問 3、4へ、 3) わからない 質問 3、4へ

2. あると回答した人は、

大学入学後に受けた傷害(外傷/障害)について、太枠で囲んだ(例)を参考にして、記述してください。

※傷害名(A~Y)と受傷害部位(1~30:次ページ)は、下記の表から選び番号で記述してください

受傷害時 学年	受傷害 時期 (月)	受傷害 部位 (次ページ 図参照)	受傷害名 (医師の診断 結果、下記の 番号参照)	通院の 有無 (○で 囲む)	練習中 (○印)	試合中 (○印)	受傷害 サーフェス (○で囲む)	天候 (○で 囲む)	復帰までの 時間 (○で囲む)	原因(分かる範囲で記述) 誘因(分かる範囲で記述)
(例) 4	8月	27	A	○		○	1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内 5. アスファルト	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	6 日(D) 週(W) か月(M)	原因(地面の緩い部分に足を取られた) 誘因 ()
(例) 2	1月	5	H	○	○		1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内 5. アスファルト	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	1 日(D) 週(W) か月(M)	原因(軽い痛みを我慢し続けたため痛みが増した) 誘因 ()
(例) 3	8月		R	○	○		1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内 5. アスファルト	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	2 日(D) 週(W) か月(M)	原因 () 誘因(朝から体調悪いまま練習を継続)
							1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内 5. アスファルト	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	日(D) 週(W) か月(M)	原因 () 誘因 ()
							1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内 5. アスファルト	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	日(D) 週(W) か月(M)	原因 () 誘因 ()
							1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	日(D) 週(W) か月(M)	原因 ()

							5. アスファルト			誘因 ()
							1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内 5. アスファルト	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	日(D) 週(W) か月(M)	原因 () 誘因 ()
							1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内 5. アスファルト	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	日(D) 週(W) か月(M)	原因 () 誘因 ()
							1. 天然芝 2. 人工芝 3. 土 4. 屋内 5. アスファルト	1. 晴 2. 曇 3. 雨 4. 雪	日(D) 週(W) か月(M)	原因 () 誘因 ()

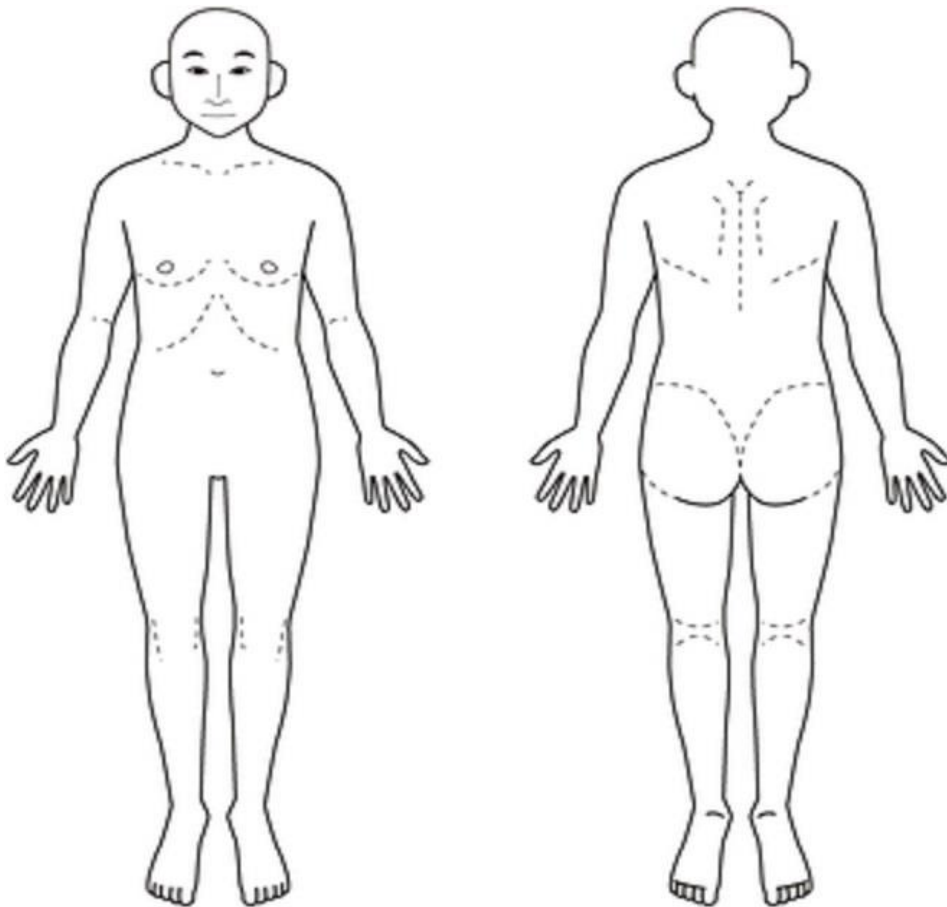
傷害名※番号を表に記述

- A. 捻挫 B. 骨折 C. 疲労骨折 D. 打撲 E. 肉離れ F. 脱臼 G. 亜脱臼 H. 筋肉の炎症 I. 腱鞘炎
 J. ヘルニア K. 靭帯損傷・断裂 L. 半月板損傷 M. 関節唇損傷 N. 骨挫傷 O. 筋挫傷 P. 脳震盪
 Q. 脳挫傷 R. 熱中症 S. 擦り傷、切り傷、刺し傷(出血が見られたもの) T. 火傷 U. 感染症
 V. 貧血 W. 月経障害 X. 摂食障害 Y. その他()

受傷害部位

※受傷した部位を下記の図を参照して選び、番号を回答してください。

1. 頭
 2. 眼
 3. 顔
 4. 頸（首）
 5. 肩
 6. 鎖骨
 7. 肩甲骨
 8. 上腕
 9. 肘
 10. 前腕
 11. 手首
 12. 手
 13. 母指
 14. 手の指
（親指以外）
 15. 背中
 16. 腰
 17. 肋骨
 18. 胸骨
 19. 腹
 20. 骨盤
 21. 股関節
 22. ソケイ部
 23. 臀部（尻）
 24. 大腿
（太もも）
 25. 膝
 26. 下腿
 27. 足関節
 28. 足
 29. 足の指
 30. その他
- ()



3. スポーツ傷害（外傷／障害）の予防について
「こんなサポートがあればいいな」と考えていることがあれば、選択肢の中から選んでください（複数可）。
また、選んだ選択肢について、具体的なことがあれば、詳しく書いてください。
- 1) トレーニングサポート
 - 2) メディカルサポート
 - 3) 心理サポート
 - 4) 栄養サポート
 - 5) その他
- ()

具体的にやってほしいサポートの内容

- 4、そのほか、ご自身の思っていることについても自由に記述してください。
（大学、所属クラブどちらに対しても構いません）

【資料3】学業成績管理体制及び到達必須成績管理基準について

- 1) 到達必須取得単位数について
- 2) 罰則規定及び支援体制、報奨制度について
- 3) 成績不良者を減らすための強化クラブ部内での支援体制について
- 4) その他

【内容】

1) 必須取得単位数について

- ・各学年終了時の取得単位数基準を設ける。

基準は以下のとおり。

1 年次春	12 単位	1 年次秋	24 単位
2 年次春	34 単位	2 年次秋	52 単位
3 年次春	68 単位	3 年次秋	84 単位
4 年次春	100 単位		

2) 罰則規定及び支援体制、報奨制度について

- ・罰則規定

上記1)の基準を下回った場合、

- 1 回目・・・本人及び監督コーチ宛にクラブ部長を通じて警告。
(本人やチームへの伝え方について決めておく必要がある。)
修学支援プログラムへの参加の義務付け。
- 2 回目・・・練習制限及び公式試合等の出場制限。
練習制限には、個人練習やチームサポート活動は含まない。
2 期連続、判定基準を満たさなかったものは公式戦参加を認めない。
停止期間は、クォーター1 (1/4 期) とする。

- ・支援体制

支援体制として、修学支援プログラムをおく。

修学支援プログラムは、当該学期終了時に判定基準を満たさなかった者に対して、次学期に開講される週1回、90分、5限目(予定)を受講することを義務付ける。

修学支援プログラムは、基礎学力の向上、マナーやパソコンのスキル向上を目指した内容とし、強化クラブ部長及びそれ以外の教員によるオムニバス形式で行う。

強化部の学生の中には勉学を苦手としている者もあり、支援体制を準備すると、頼ってしまう。あえて救済など作らず、自分で考えて行動させたほうがよいという意見もあったが、学力の低い学生たちの場合、やはり放任は難しいのではないかと。

修学支援プログラムを受講することは、基礎学力の向上を促す効果もあることから、実施する方向で意見がまとまった。

- ・報奨制度について

対象者は全国大会出場レベルのクラブという意見も出たが、最終的には、その要件を外し、以下の条件にあてはまる団体および個人を対象に表彰する制度とした。

対象となった団体および個人には、賞状が授与される。授与は、国際スポーツ推進機構の長である学長が行う。授与の場所、日時等については別途検討する。

☆最優秀学業成績団体賞

部員の平均 GPA がもっとも高い部に与える。

☆最優秀学業成績個人賞

4 年生で卒業する部員のうち、最も高い GPA を獲得した者に与える。

☆優秀学業成績個人賞

4年生で卒業する部員のうち、上位〇%のGPAを獲得した者に与える。

☆年間最優秀学業成績個人賞

3年生以下の学年ごとに、当該年度履修科目のGPAが最も高い部員に与える。

☆年間優秀学業成績個人賞

3年生以下の学年ごとに、当該年度の履修科目のGPAが上位〇%である者に与える。

なお、この制度に該当する学生の選定方法は、GPA3.0以上のものを選抜し、その選抜リストを強化クラブ監督宛に送付・確認したのち、表彰することとする。〇%の「〇」の部分は、秋にスポーツ推進課から送付された成績データをもとに、該当する人数と割合を確かめた上で、決定することとした。スポーツ推進課からのデータより、GPA3.0以上は学年により異なるが13~17%である。そこで、〇を10%にしてはどうかと検討中である。

- ・この制度は2020年度開始予定とする。なお、開始にあたり、事前告知期間を設ける。告知は2019年度中に行うこととする。

3) 成績不良者を減らすための強化クラブ部内の支援体制について

- ・他大学では、学生による学生のための自治活動を定着させ、そのことにより競技成績や学業成績に良好な影響を与えている事例が多く見られる。

本学強化クラブにおいても、そのような体制を整えていくことが必要である。

たとえば、1チーム10名ごとに1名のリーダーをおき、それぞれチームごとに、また、異なるチーム同士が互いに助け合いながら、学業成績や競技成績の問題点を考え、目標をたて、実行していくようなスタイルを作ることができれば、学業と競技双方に良い効果が見込める。

4) その他

- ・一生懸命やっても成績がとれない、部活動の時間が長いため、勉強時間が確保できないような個別に対応が必要な案件については継続審議とする。

(資料4)「事業を実施する上で、どのような部分に困難な点があり、その困難な点を解決するためどのような方策をとったか」

強化クラブ総括の活動は、UNIVASの提唱する「安全・安心」というスローガンに則り、具体的には強化クラブの健全な活動、学業と勉学のバランスの取れた大学生活の推進と考えている。

そのために、「緊急時対応計画」、「傷害予防策」、「学業成績管理体制・到達必須成績管理基準」という3つの事業を予定したが、“緊急対策”として認識されつつも、実際の有効活用に時間がかかっている。

強化クラブ総括の3つの事業については、強化クラブとの調整、大学との調整が欠かせない。本総括のSAとシニアスタッフ、スタッフの全員が一同に会することも困難な状況の中、授業の合間をぬって話し合い、3つの事業について検討、実施を進めてきた。

1. 「緊急時対応計画」

「緊急時対応計画」については強化クラブごとに実施することとなった。今後は、この計画が機能しているかどうか検証していく必要がある。本学強化クラブは、専任教員がクラブ部長となっていることから、強化クラブ部長に対して緊急時対応計画の配布に関して連絡し、その後の使用状況について報告していただく等、強化クラブ総括と強化クラブと情報共有を行う必要がある。

2. 「傷害予防策」

この件に関しては、「各クラブ全選手への傷害実態調査」は避けて通れないものであるため、現在の活動状況から、実施可能なクラブから優先的に実施することを、大学本部に打診し、既に一部の強化クラブ(※)では実施中である。

※「硬式野球部」では、本事業のスタート直後から、スポーツ傷害の予防策として、過酷なトレーニング(オーバートレーニング)や全力を出し切る試合時に受ける筋・骨へのスポーツ特有のダメージを予知(一次予防)・予防(二次予防)する事で、重症に至る前に出来るだけのケアをし、心身ともに最善の状態プレーし、最高のパフォーマンスが発揮できるようにしている。このため、本人の心身に対する自覚症状や周囲の者による他覚所見の“申告”に頼るだけでなく、定期的に血液検査をすることで、痛みを自覚する前の段階で筋・骨のダメージの状態を“スポーツ・医科学”の力で確認する方法(筋はCPKを骨はALPといった各組織から血中への逸脱酵素により評価する方法)を取り入れ、良い成果を挙げている

3. 「学業成績管理体制・到達必須成績管理基準」

「学業成績管理体制・到達必須成績管理基準」については、方向性が定まり、大まかな基準については検討が進んだ。しかし、実施に運営していく上でさらに詳細な検討が必要である。また、規定となるため学内のしかるべき手続きが必要となる。

◎企画マーケティング総括最終報告書

(スポーツ・アドミニストレーター：碓井外幸、シニアスタッフ：田部井 潤)

本年度の事業計画

- ①本学の強化クラブが有する内部資源（人的資源・物的資源）の調査（実施済）
- ②大学スポーツに対する学外からのニーズを考慮した企画の立案と実施準備（実施済）
- ③立案した企画の実施と検証（実施済）

組織および担当

シニアスタッフ：田部井潤

スタッフ：高田知和、上代圭子、梶田美奈子

- ①本学の強化クラブが有する内部資源（人的資源・物的資源）の調査（調査票の作成、実査、集計）
：田部井、高田担当
- ②大学スポーツに対する学外からのニーズを考慮した企画の立案と実施準備（多様なステークホルダーによる企画提案と実現可能な具体的計画の策定・準備）：田部井、上代担当
- ③立案した企画の実施と検証：田部井、梶田担当

スケジュール

- 2018年8月 スタッフへの概要説明と了解を含めた組織作り、
2018年9月 企画マーケティング総括内での意思疎通と計画立案
2018年10月 内部資源調査の実施
2018年11月 ステークホルダーによる企画提案の調査
2018年12月～2019年1月 実現可能な具体的計画の策定・準備
2019年2月～3月 立案した企画の実施と検証

シニアスタッフ・スタッフ間の連絡に関しては、電子メールを通じて行っている。

これまでの成果

- ①本学の強化クラブが有する内部資源（人的資源・物的資源）の調査
8月の組織作りの段階から調査票の作成をはじめ、企画マーケティング総括内部並びに大学事務（スポーツ推進課並びに大学事務局）での検討を経て、10月初旬に実査した。
調査は、本学スポーツ推進課の職員が、13ある強化クラブの中の11の強化クラブ（硬式野球部、女子ソフトボール部、サッカー部、女子サッカー部、ゴルフ部、硬式庭球部、駅伝部、ウエイトリフティング部、アメリカンフットボール部、アーチェリー部、チアリーディング部）の監督ないしはコーチに対する訪問調査の形で実施した（吹奏楽部と剣道部は、分野並びに本学における組織上の問題から除外した）。調査票の質問項目書式は資料1で示す。
調査データの保管・管理に関しては、スポーツ推進課が責任をもって行っている。

②外部の大学スポーツに対するニーズを考慮した企画の立案

本学の強化クラブにおける内部資源を踏まえて、大学スポーツに関する利害関係者たちがどのようなイベントニーズを抱いているのかについて、様々な関係者による情報収集を行った。ただし、この情報収集では、単に外部関係者に漠然としたニーズを聴取する形式ではなく、あくまでも本学の内部資源の活用という実態を前提としたニーズ調査を行うように意図した。また、本委託研究の目標が「国際スポーツ・アドミニストレーター」の育成事業にあるため、前述したSEI事業総括における講義科目「S・A入門」の受講生の教育を考慮した形でも、事業を進めた。

具体的には、(1)「S・A入門」の受講生、(2)本学スポーツ2学科の演習履修者、(3)強化クラブの監督・コーチ、という3つの対象による企画・立案を計画した。

(1) 「S・A入門」の受講生

「SA入門」の11月22日の講義中にグループワークの課題として実施し、学生グループからは以下のような事業テーマ(24テーマ)が出された。

1. 「アーチェリー体験会」(アーチェリー部)、2. 「見て・触れて・知ろう!アーチェリー」(アーチェリー部)、3. 「タッチ・フットボール」(アメリカンフットボール部)、4. 「学生アメリカンフットボール秋季リーグ2018」(アメリカンフットボール部)、5. 「三宅宏実選手のウエイトリフティング講座」(ウエイトリフティング部)、6. 「親子サッカー教室」(サッカー部)、7. 「大学生に楽に勝とう!!」楽勝鬼ごっこ」(駅伝部)、8. 「剣道を見よう」(剣道部)、9. 「親子ふれあい剣道SAMURAI」(剣道部)、10. 「少年野球教室」(硬式野球部)、11. 「プロに教わるゴルフ教室」(ゴルフ部)、12. 「お年寄りコンペ」(ゴルフ部)、13. 「運動会」(女子サッカー部)、14. 「そげけれ!サッカーボール」(女子サッカー部)、15. 「サッカー大会」(女子サッカー部)、16. 「ソフトボール教室」(女子ソフトボール部)、17. 「TIUカップ」(女子ソフトボール部)、18. 「ソフトボール初心者教室」(女子ソフトボール部)、19. 「サッカー教室」(サッカー部)、20. 「親子で楽しむSoccer!」(サッカー部)、21. 「高校野球を通してのチアリーディングでの魅力を広めよう」(チアリーディング部)、22. 「みんなで楽しくチアをしよう」(チアリーディング部)、23. 「ワクワクテニス講座」(硬式庭球部)、24. 「熱血!!テニス講座!!」(硬式庭球部)

(2) 本学スポーツ2学科の演習履修者

11月に2年生の演習科目(「基礎演習」)の1ゼミ(碓井教授のゼミ)で試験的に実施した。そこで出された事業テーマ(6テーマ)は以下の通りである。

1. 「なでしこリーガーに学ぶサッカー教室」、2. 「TIUジュニア駅伝」、3. 「ブラインドサッカーをやってみよう!」、4. 「わくわく小学生野球教室」、5. 「みんないつ走るの!? 今でしょ!」、6. 「サッカーゲーム大会」

(3) 強化クラブの監督・コーチ

実施可能な強化クラブに絞っても事業計画の推進と3月末までの実施を行った。

事業実施上の困難な点とその解決策については、資料2として報告する。

資料1	調査票の質問項目 書式	第1回「スポーツ庁委託事業」本学実施のための調査
記入基準日	2018年10月1日	回答者 ()
	質問項目	回答例
1	クラブ名	バスケットボール部
2	創設年	2016年
3	監督名	田臥勇太
4	コーチ名 (後部)	国際太郎 (オフェンスコーチ)、国際次郎 (ディフェンスコーチ)、国際三郎 (作戦コーチ)
5	部長名	松岡修造
6	コーチの指導資格	国際太郎 (JBA公認A級コーチ)、国際次郎 (JBA公認B級コーチ)、国際三郎 (JBA公認S級審判)
7	部員数	男子18名(4年2名、3年8名、2年3名、1年5名)、女子15名(4年2名、3年3名、2年2名、1年8名)、マネージャー3名(3年女子1名、1年女子2名)
8	クラブOBの登録人数	およそ60名
9	クラブOBとの交流	郵送ならびにE-mailにて連絡、年に1度全体総会にOBを招待
10	活動日	月曜日を除く毎日
11	活動(練習)時間	火曜日～金曜日16:00-19:00、土曜日10:00-14:00、日曜日は主に試合
12	合宿期間	春合宿(2月、1週間)、夏合宿(8月、10日間)
13	合宿場所とその選定理由	春合宿は埼玉県立体育館、選定理由は国際太郎コーチの前勤務先のため、夏合宿は野沢温泉、選定理由は他大等との練習試合が組みやすいため
14	長期休業日	各定期試験の1週間前から当日まで。年末年始、シーズンオフ(12月～2月)中の指定期間、8月の盆休みの期間
15	施設設備	専用の体育館(バスケットコート2面)、ウエイトレニング施設(ハレーホール部と共有)
16	過去3年間の社会的要請	BJリーグ「新木ブレイクス」より、施設利用の依頼(2017年)、地域の国際中学校からのコーチ派遣依頼(2017年)
17	同要請への対応	施設利用は、日時の不一致から断った。コーチは、学生を5名派遣した。
18	本年度可能な事業	小学生を対象とし学生を指導者としたバスケットボール教室(対象者50名程度)
19	本年度事業の実施可能時期	リーグ戦終了後の2月が望ましい
20	チームのキャラクターグッズ等	東京バスケットのマグカップ、タオル等を作成販売
21	管理栄養士からの定期的調査・指導の有無(具体的に)	指導経験有り。年に1回バスの栄養士による栄養講習会開催。
22	選手のための健康・体力・練習管理(血液検査、等) 選手のサポートを行う専門スタッフの職種、人数、業務内容	1) トレーナー3名、1名は合宿帯同のみ。2名は、合宿帯同と坂戸にて選手のケアを週3回 2) 管理栄養士 非常勤 月1回 選手との面談、食事調査4月に1回実施。他に年1回バスの栄養士による60分の講習会を実施 3) メンタルトレーナー 3か月に1回 個人面談と年1回の全体調査 4) 大塚製薬から水分補給セミナー実施 年1回6月
23	活動状況(朝練習の有無と時間、練習体制、平均練習時間)	朝練習あり(5:30から1時間)、3つのグループにわかれ、コーチが1名、平均練習時間2時間
24	プロ・社会人チームとの交流	有り、年1回(OOと練習試合)
25	小・中・高校チームとの交流(練習指導)	有り、年5回(小学生:OOスポーツクラブ、OO小学校など年0回、中学生:OO中学校と練習試合、高校生:なし)

資料2 「事業を実施する上で、どのような部分に困難な点があり、その困難な点を解決するためどのような方策をとったか」

企画マーケティング総括の活動を端的に表現すれば、大学スポーツにおいて大学が有する人的・物的資源を活用し、社会貢献のためのスポーツ事業を企画・実施することにある。

しかしながら、以下に述べるような問題を抱えている。

1. 本支援事業が実質的に半年という短期間であるため、事業の準備・計画・実施といった一連の作業を行うためにはあまりにも短い。
2. 他の総括と違い本総括の事業では、ステークホルダーとして大学外の関係者を想定せざるを得ない。大学内で自己完結する事業であれば現実的には無理も利くが、ニーズの充足、利害関係の調整といった点では配慮が必要である。

これらの問題に対して、次のような方策をとっている

1. 委託期間である半年で自己完結する事業のみならず、もう少し長い期間で成し遂げる事業の企画等も考慮することとした。このような事業を考慮することにより、これまで本学が行ってきたスポーツ貢献事業の活用や事業への外部参加者のニーズの充足が可能となる。具体的には、本学が毎年主催してきたサッカー大会の企画改善を考慮している。
2. 本来ならば大学外部の関係者が抱く幅広いニーズを考慮に入れて、事業の企画・立案をすることが望ましいが、現実問題としては大学の有する人的・物的資源の制約がある。そのため、大学の内部資源の活用を前提とした事業企画の企画・立案とすることにした。具体的には、学内関係者（学生、強化クラブの監督・コーチ、教員）等の発想による実施可能な事業企画を考えている。

③本年度において、実施が可能となった事業について報告する。

最終的に事業が可能となった強化クラブは4つであり、それぞれの事業内容についてクラブから提出された事業報告書を記載する。

(1) 女子ソフトボール部

1. 事業名：ソフトボール教室 in いるま
2. 事業目的：ソフトボール競技人口の裾野を広げ、普及を支援する
3. 事業内容：東京国際大学女子ソフトボール部員等による地域の幼稚園児（親子）～高校生を対象としたソフトボール教室
4. 事業対象者：埼玉県入間市在住の幼稚園児（親子）～高校生
5. 実施期日：2018年12月1日（土）9時～15時
6. 事業実施場所：埼玉県入間市黒須運動場
7. 事業実施者：主催：（公財）入間市振興公社
協賛：NPO法人ソフトボール・ドリーム
協力：東京国際大学女子ソフトボール部、戸田総合中央病院ソフトボール部
8. 実施内容：
8:30 開校式
9:00 エキシビジョンマッチ 実業団チーム「戸田総合中央病院ソフトボール部」対「東京国際大学女子ソフトボール部」
10:30-12:00 実技指導（守備編） カテゴリー別（幼児、小学生、中学生、高校生）
13:00-14:50 実技指導（バッティング）、ピッチャー打ち
15:00 閉校式

9. 事業の目標と評価：参加者 約 350 名

評価については、指導者として事業に参加した女子ソフトボール部員 19 名を対象に無記名の質問紙調査を実施した。質問項目の内容、および調査結果は以下のようであった。

1) イベントについて

(1) 今回のイベントがソフトボールの普及に有効だと思いますか (5 段階評価)

非常に やや やや あまり
有効だと思う 5— 4— 3— 2— 1 有効だとは思わない

この質問に対する回答は、「非常に有効だと思う」の回答が 11/19 名 (57.9%)、「やや有効だと思う」への回答が 8/19 名 (42.1%) であり、そのほかの評価への回答はなかった。これより、指導者の立場からの検討では、事業目的である『ソフトボール競技人口の裾野を広げ、普及を支援する』がほぼ達成されたのではないかと考えられた。

(2) 指導者として参加していかがでしたか (5 段階評価)

非常に やや やや あまり
良い経験になった 5— 4— 3— 2— 1 良い経験ではなかった

この質問に対する回答は、「非常に良い経験になった」の回答が 15/19 名 (78.9%)、「やや良い経験になった」への回答が 4/19 名 (21.1%) であり、そのほかの評価への回答はなかった。この結果より、指導者として参加したソフトボール部員にとってもこの事業が有意義なものになったものと考察された。

2) 指導者として参加した感想 (自由記述)

次のような感想が寄せられた。主な感想を抜粋して以下に示す。

- ・相手の気持ちになって、どうしたら楽しめるかなどを学ぶことができた。
- ・わかりやすく伝えるために、言葉を選んで伝えなければ理解してもらえないことがわかった。
- ・参加者が多いため、誘導するのが大変だった。
- ・小学生が楽しそうに動いているのを見て、こちらも楽しくなってきた。
- ・ソフトボールの普及のためにこのようなイベントはとても良いと思った。
- ・初めてこんなに小さな子どもたちを教えた。遊びを通して教えるソフトボールによって、小さな子どもでもソフトボールを楽しんでくれたのが良かった。
- ・親子で一緒に楽しめる内容があった。簡単にわかりやすく説明することや子どもたちに楽しんでもらいつつ、いかに素早い行動をしてもらうかなど、考えて工夫することが多く、楽しくも難しい教室だった。
- ・園児への指導では、ルールを簡単にすることや使用する道具を柔らかい素材にするなどの工夫をしたら、もっと楽しんでもらえたのではないかと思う。
- ・また機会があったら、ぜひ参加したい。
- ・自分のコミュニケーション能力の無さや小さな子どもへの対応のできなさに気が付かされ、「人に教える」ことの難しさが改めてわかった。
- ・小さな子に飽きさせず、興味を持って楽しんでもらうことが難しかった。
- ・話を聴いてもらえるよう、興味を引く話や面白いことを考えておこうと思った。
- ・危険な状況になってしまわないよう、自分たちが安全面に気を付けなければいけないと思った。
- ・相手に理解してもらうため、わかりやすい言葉で伝えることにより、自分でも技術の基礎を見直すことができた。
- ・参加者の一生懸命さが伝わってきて、刺激を受けた。
- ・自分から参加者に話しかけたら、徐々に「これが分からない」と言ってくれるようになった。自分から歩み寄ることが大切なのだと思えて感じた。
- ・教えることの厳しさや大変さを知った。
- ・自分の感覚だけで話をすると伝わらないので、どういった身体の使い方をしたら良いか、具

体的に説明するのが大変だった。

- ・自分でプレイするよりも教えることの方が難しいと感じた。
- ・自分で考えてアドバイスを出していたので、自分自身もたいへん勉強になった。
- ・どういう言葉を使ったら伝わりやすいのか、どうやったら楽しくソフトボールができるのか、勉強が必要だと思った。
- ・ソフトボールを知るきっかけになったり、好きになってくれたら、とても嬉しい。
- ・ボールを触ったことがない小さな子どもたちには投げ方、打ち方のような技術を教えるよりも、まずボールの持ち方や道具でやる楽しさを教えることが大切だということを学んだ。貴重な経験となった。
- ・対象者の年齢を考えて言葉や表現を選ぶことや、どのレベルで教えるかを自分で調節することが大事だと感じた。
- ・小さな子どもたちには特に怪我をさせないように考慮して指導に当たった。

以上が自由記述による女子ソフトボール部員の感想であるが、部員一人一人がさまざまなことを感じ、考え、経験させてもらった貴重な事業となったことを報告する。



(2) ウェイトリフティング部

事業名：ウェイトリフティングの基本を身につける

1. 事業目的

本事業の目的は、ウェイトリフティング競技者人口増加および高校生競技者の技術力向上である。

(公財) 全国高等学校体育連盟の報告では、平成 30 年度の高校生の競技人口は男子 1,672 名、女子 466 名で、計 2,138 名である。どのスポーツにおいても競技力が競技人口によって押し上げられると考えられる。高校生の競技人口を増やし、その競技技術を高めることは、日本におけるウェイトリフティングの競技力を高めることにつながる。また、本学の現役選手が高校生の指導することにより、本学卒業後にウェイトリフティングの指導を行うという意識付けや指導力の向上に役立つことが期待されるため、本学の選手にとっても指導を受ける高校生選手にとっても有効な機会であると考えられる。

2. 事業内容

TIU ウェイトリフティング部選手による高校生を対象とした練習指導。

3. 事業実施日

2019 年 1 月 26 日 (土)、27 日 (日)

4. 事業内容

福島県立田村高等学校ウェイトリフティング部女子選手 3 名を本学ウェイトリフティング部の練習場に迎えて、本学選手による技術指導を行った。本学の女子選手と高校生女子選手がペアとなり、2 日間にわたり一対一での練習を行った。

練習に際しては、本学ウェイトリフティング部の監督とコーチも全体の指導に当たり、安全管理を行った。

高校生選手 (左) と指導にあたる本学の選手 高校生選手 (左) と指導にあたる本学の選手



指導にあたる本学の選手（左）と高校生選手



指導を見守るコーチ（左）と高校生選手



5. 事業評価

参加した高校生選手からは、練習量の多さと練習のバリエーションの多さについて高校と大学の違いが実感できて勉強になったというコメントが得られた。

指導にあたった本学の選手からは、教えることの難しさと基本の重要性を再認識できたので、今後に生かしたいというコメントを得た。

(3) 硬式庭球部

1. 事業名 東京国際大学フェスティバル
2. 事業目的 テニス競技を通じた社会貢献（参加者の交流、競技の継続、大学スポーツへの理解等）
3. 事業内容 広域地域の中高生を対象としたテニス大会
4. 事業実施要項（下記の通り）

平成30年度 東京国際大学 Tennis Festival 大会実施要項

- 1 大会名 東京国際大学テニスフェスティバル
- 2 主催 東京国際大学
- 3 期日 平成30年12月26日(水)～27日(木)
- 4 会場 東京国際大学テニスコート(砂入り人工芝5面、ハードコート2面使用)
埼玉県川越市の場北2509 TEL049(277)5833
- 5 種目 団体戦(2複3単)
- 6 競技方法 2複3単の5ポイント(全試合5ポイント)を行う。
(1)シングルスNo.1、ダブルスNo.1、シングルスNo.2、ダブルスNo.2、
シングルスNo.3の順で試合を行い、その後エキジビションマッチを実施する。
(2)試合方法は、1セットマッチ(6ゲームオール後、12ポイントタイブレーク方式)とする。
- 7 参加資格 全国大会出場実績校および、東京国際大学硬式庭球部部員出身校
- 8 参加制限 各校シングルス実力順による9名以内の登録
- 9 使用球 DUNLOP FORT
- 10 参加申込 別紙申込用紙に記入し、12月22日(土)必着で下記宛に申し込みお願い致します。
FAX 049-232-3300 東京国際大学 入学センター 大野 宛
- 11 傷害補償 参加チームは各自傷害保険に加入してください。
不慮の事故・傷害などにおいて当大会は一切の責任を負いかねます。
- 12 その他 (1)大会について
12月26日(水)、12月27日(木)両日共に下記にてお願い致します。
9時試合開始、8時30分から8時50分をオフィシャルの練習時間とします。
(2)宿泊・昼食について
各校にて手配の程お願い致します。
(3)事前練習に関して
遠方の学校は事前に東京国際大学にて練習が可能ですので
大野までご連絡ください。
(4)問い合わせ
硬式庭球部コーチ 大野泰和 携帯 090(8948)0610

5. 参加校

東京学館新潟高校、新潟県ジュニアチーム、日大東北高校、富山第一高校、京都共栄高校、東陵高校

6. 対戦日程表

2018 東京国際大学テニスフェスティバル 対戦日程

12月26日（水） 第1日目 1対戦2時間40分

東京国際大学会場 集合8:30 試合開始9:00
1対戦2時間30分

コート 時間	1	2	5	3	4
練習コート 8:30~	学館A	日大東北		京都共栄	富山第一
9:00 ~ 11:30	学館A	日大東北	2対戦を交互に	京都共栄	富山第一
11:40 ~ 14:10	学館A	京都共栄	2対戦を交互に	日大東北	東陵
14:20 ~ 16:50	学館A	富山第一	2対戦を交互に	京都共栄	東陵

ハードコート
1対戦2時間30分

コート 時間	6	7
練習コート 8:30~	東陵	学館B
9:00 ~ 11:30	東陵	学館B
11:40 ~ 14:10	富山第一	学館B
14:20 ~ 16:50	日大東北	学館B

12月27日（木） 第2日目

東京国際大学会場 集合8:30 試合開始9:00
1対戦2時間30分

コート 時間	1	2	5	3	4
練習コート 8:30~	学館A	東陵		日大東北	富山第一
9:00 ~ 11:30	学館A	東陵	2対戦を交互に	日大東北	富山第一
11:40 ~ 14:10	日大東北	京都共栄	2対戦を交互に	富山第一	東陵

ハードコート
1対戦2時間30分

コート 時間	6	7
練習コート 8:30~	京都共栄	学館B
9:00 ~ 11:30	京都共栄	学館B
11:40 ~ 14:10	学館A	学館B

【注意事項】

- ・団体戦終了後は対戦校で相談の上、個人戦を入れてください。
- ・まとまった昼食休憩についてはとりませんので、昼食は試合の空き時間に適宜とるようにしてください。
- ・ボールはNT8、4個入りを各対戦に3缶渡します。
ボールは大会本部で準備します。

7. 事業後所感

【大会に関して】

- ・大会運営に関しては本学硬式庭球部学生が行い、参加高校生に対して試合に関するアドバイスを進路の話も含めて学生目線での関わりを行った。
- ・東北地区・北信越地区に関しては冬場の練習場所確保が厳しいことから、練習場所の提供という点も目的の一つとした。
- ・大会の内容に関しては大学側の定めた形式ではなく高校側の顧問の要望を受けながら進めた。
- ・本学卒業生が顧問を務める京都からのチームも参加した。
- ・高校側は関東遠征という形で行うことができ、チーム力向上の側面もあるため、個人戦ではなく団体戦方式にて大会を行った。また、本事業の趣旨からはトーナメント方式ではなく、より試合回数を経験できるリーグ戦方式にて開催した。

- ・試合終了後は指定時間までは各高校顧問の相談にて練習試合を行った。スケジュール終了後にもコートを開放し、各チーム練習をおこなえるようにした。
- ・川越東高校が参加予定であったが、それまでの大会にて負傷者がでたことやジュニア大会を優先したい選手がいたためキャンセルとなった。それを受けて参加意向があった北信越地区の富山第一高校が参加することになった。
- ・大学にて開催を行うことで、大学という場所、環境を高校生に体感させる事ができていると感じた。過去には、このイベント参加者から本学に入学した学生もいる。

【参加高校生からの声】

参加した高校生からは、試合がたくさんできる、知らないチームと試合ができる、雪がないから屋外でテニスができる、練習もできる、大学というところを知るきっかけになる、もっと教えてほしいといった声があがった。

(4) チアリーディング部

1. 高校生練習会

開催日： 2019年1月26日

内容： 高校生練習会

参加者： 広島県 如水館高校

参加人数： 部員24名、指導者3名

練習内容： ウォーミングアップ、体幹倒立、タンブリング¹、技合わせ（タンブリング、スタンツ²など）、通し練習

TIUの監督や学生の感想：

如水館高校は、難度が高く、素晴らしいチームだった。特にすべての技に回転技が入っていて迫力があり、本学の学生も大変刺激を受けた。

如水館高校 WAVES は、JOC ジュニアオリンピックカップ大会（第29回 全日本高等学校選手権大会）5位入賞の実力校である。

1. タンブリング (Tumbling)：競技フロアから始まり、競技フロアで終了する体操技、アクロバット技
2. スタンツ (Stunt)：1人または複数のベースが、競技フロアより高い位置にトップを支える技。「マウント」とも呼ばれる。組み体操。ベースが支えるトップの脚の数によって「シングル」または「ダブル」レッグ（=片足・両足）スタンツと定義される。

◎SEI 事業総括最終報告書

(スポーツ・アドミニストレーター：碓井外幸、シニアスタッフ：麓 正樹、木原慎介)

①本年度の主要事業

大学スポーツ振興事業として採択された本学では、強化クラブ総括、企画マーケティング総括、SEI 事業総括という3部門において、「国際スポーツ・アドミニストレーター育成の基礎作り」に関する取り組みがなされる。この中でもSEI 事業総括は、本学のスポーツ力と英語力を統合して、学生を育てていこうとする部門である。本年度の主要事業の実施状況の概要は以下のとおりである。

1) 国際スポーツ・アドミニストレーター (ISA) 育成のためのプログラム検討 (英語力とスポーツ力をコアにした新たな取り組みとして)	実施済み
2) 「スポーツ・アドミニストレーション (S・A) 入門」講座の開設と 英語科目 (English comprehension IIおよびCommunication basic II) の展開 (学生の知識修得と意欲の向上、講座の成果評価)	実施済み
3) 次年度以降の取り組みに向けた検討	実施済み

②組織および担当

SEI 事業総括のスタッフは以下のとおりであり、シニアスタッフがまとめ役となり、スタッフとともに各種事業を遂行する。

シニアスタッフ	麓正樹、木原慎介
スタッフ	布川清彦、鄭志誠、田中マキ子、阿部隆行

それぞれのスタッフの役割は以下のとおりである。

SEI 事業総括、涉外(国際スポーツ推進機構、強化クラブ総括、企画マーケティング総括およびSA 入門担当特別講師、英語科目担当講師など)、定期ミーティングの企画運営	麓、木原
SA 入門授業担当シニアスタッフからの情報(講師所感など)収集、依頼、取りまとめ	阿部、(布川)
SA 入門授業(最終回)における学生アンケートの作成、依頼、集計、取りまとめ	田中、(布川)
英語科目(English comprehension IIおよびCommunication basic II)における学生アンケートの作成、依頼、集計、取りまとめ	鄭、(布川)

③これまでの経過と今後の予定

これまでの事業実施経過と今後の予定は以下の表のとおりである。

2018年8月	○ 組織作り ※上記(組織) 参照 ○ 講義内容検討・決定会議 ※「シラバス」 参照 (資料1)
2018年9月	○英語科目スタート(～12月まで) Communication Basic II (60分×45回)Kevin Mueller、他4名 English Comprehension II (60分×45回)Kevin Mueller、他4名 ○スポーツ科目「S・A入門」スタート(～12月まで)※S・A入門講師所感」参照 (資料2) 第1回 9月5日 碓井外幸 (SA) 実施済 第2回 9月12日 堀川昭子 (シニアスタッフ) 実施済 第3回 9月19日 佐藤直子 (客員教授) 実施済 第4回 9月26日 麓 正樹 (シニアスタッフ) 実施済 第5回 10月3日 古田敦也 (特命・客員教授) 実施済 第6回 10月10日 木原慎介 (シニアスタッフ) 実施済 第7回 10月17日 古田敦也 (特命・客員教授) 実施済 第8回 10月31日 赤池行平 (シニアスタッフ) 実施済 第9回 11月7日 三宅義信 (特命・客員教授) 実施済 第10回 11月14日 宇津木妙子 (客員教授) 実施済 第11回 11月21日 田部井潤 (シニアスタッフ) 実施済 第12回 11月28日 大原 伸 (硬式野球部コーチング) 実施済 第13回 12月5日 大原 伸 (硬式野球部コーチング) 実施済 第14回 12月12日 赤池行平 (シニアスタッフ) 実施済 第15回 12月19日 麓 正樹 (シニアスタッフ) 実施済
2018年10月	○SEI 事業総括第1回ミーティング ※「第1回ミーティング」参照 (資料3) ○各担当の取り組み
2018年11月	○SEI 事業総括第2回ミーティング ※「第2回ミーティング」参照 (資料4) ○11/21(水) 英語科目担当者との打ち合わせ(アンケート内容と実施方法について等) ○各担当の取り組み
2018年12月	○SEI 事業総括第3回ミーティング ※「第3回ミーティング」参照 (資料5) ○スポーツ科目「S・A入門」最終回、アンケート実施 ※「受講者アンケート」参照 (資料6) ○英語科目「CBII」、「ECII」最終回、アンケート実施 ※「受講者アンケート」参照 (資料6) ○SEI 事業総括第4回ミーティング ※「第4回ミーティング」参照 (資料7)
2020年1月	○受講者の成績評価 【英語科目】Listening、Reading、Writing、Speaking テスト ※Speaking についてはスポーツ科目におけるレポート内容と関連付ける。 【スポーツ科目】シニアスタッフによる授業8回分において修得した知識とそれに基づくスポーツ事業の展開の可能性について考察するレポート。 ○SEI 事業総括第5回ミーティング ※「第5回ミーティング」参照 (資料8) ○アンケート集計分析 ※予定
2020年2月	○SEI 事業総括第6回ミーティング ※「第6回ミーティング」参照 (資料9) ○本年度プログラムの、教員による自己評価、受講者による評価のまとめ ○最終報告書作成
2020年3月	○次年度プログラムの策定 実践的な英語科目の内容、スポーツボランティア参加とスポーツイベント実施に向けて、地域などの外部組織との連携構築の検討など ○最終報告書作成

事業実施上の困難な点とその解決策

事業実施上の困難な点とその解決策については、資料10として報告する。

資料1～10

資料1：シラバス

科目授業名 Course Title	スポーツ・アドミニストレーション入門						
担当者 Instructor	碓井外幸						
開講期 Semester / Year	秋学期		曜日時限 Timetable		水曜日 4時限		
教室 Room			単位数 Credits		2 単位		
授業コード Class Code			履修年次 Enrollment Year		1年～3年		
科目ナンバリング							
授業内容 Course Description	「日本版 NCAA」や「大学スポーツ・アドミニストレーターの設置」などが文部科学省やスポーツ庁で議論されており、本学はその振興事業である「大学スポーツ振興の推進事業」に採択されています。その中の重要な目的の一つが、がスポーツ・アドミニストレーターの育成です。このような中で「スポーツ・アドミニストレーターとは何か?」、「大学スポーツ選手はどのようにあるべきか?」、「大学スポーツの指導者はどのようにあるべきか?」、「大学スポーツはどのように振興すべきか?」など、スポーツ・アドミニストレーションの視点から、基本的な知識を学ぶとともに、それらを統合しつつ、他者と協働的に学びます。						
到達目標 (授業の狙い) Objectives	スポーツ・アドミニストレーションに関する基本的な知識を身につけることができるようにする。身につけた知識を用いて、他者と協働的な活動を行うことができるようにする。						
授業方法 Method of Instruction	パワーポイント、映像、板書や資料などを用いた講義形式の授業と、グループディスカッションやグループによるプレゼンテーションなどを交えた授業を行う。						
準備学習 Class Preparation	本授業は、複数の講師による輪講形式で授業が進められます。毎回の授業ごとに準備学習は異なるので、担当教員の指示に従ってください。						
教科書 Text	特に指定しない。						
参考文献 Reference Books	参考書・参考資料等は授業中に適宜指示する。						
授業計画 Course Outline (講義の順番は前後する場合があります)							
		講義担当	タイトル (仮称)				
第1回	9月5日	碓井外幸	「ガイダンス、日本版 NCAA、スポーツ・アドミニストレーター」				
第2回	9月12日	堀川昭子	「トップアスリートの栄養学」				
第3回	9月19日	佐藤直子	「スポーツ国際大会の開催」				
第4回	9月26日	麓 正樹	「スポーツにおける平常心について」				
第5回	10月3日	古田敦也	「激動の時代を生き抜こう」				
第6回	10月10日	木原慎介	「スポーツがもつ価値とは」				
第7回	10月17日	古田敦也	「持続可能なスポーツ社会」				
第8回	10月31日	赤池行平	「職業としてのスポーツ指導 1」				
第9回	11月7日	三宅義信	「オリンピックの意義」				
第10回	11月14日	宇津木妙子	「スポーツによる国際貢献」				
第11回	11月21日	田部井潤	「学校、地域社会におけるスポーツ教育の展開」				
第12回	11月28日	大原 伸	「アメリカ大学スポーツ事情」				
第13回	12月5日	大原 伸	「スポーツマネジメント」				
第14回	12月12日	赤池行平	「職業としてのスポーツ指導 2」				
第15回	12月19日	麓 正樹	まとめ				
成績評価基準 Evaluation							
平常点% Class Evaluation	10	定期試験% Exam	0	レポート% Report	90	その他% Others	0
その他詳細 Details	○平常点：授業全般やレポートへの取り組み姿勢 ○授業期間中に複数回のレポート提出を求める。その内容で評価する。						
特記事項 Particular Note	本授業は、複数の講師による輪講形式で授業が進められます。授業方法には講義形式、グループディスカッションや発表が含まれるため、受講生は、主体的・能動的、協働的に学ぶことが求められます。						
授業に関する質問への対応 Professor Contact Hours	メール連絡もしくは授業終了後などに直接日程調整を行い、オフィスアワーなどを利用して、担当の先生に質問する。						

資料2：S・A入門講師所感

「スポーツ・アドミニストレーション入門」講義所感

1. 講師所感（シニアスタッフ分）

- (1) 第1回 碓井先生 「日本版NCAA とスポーツ・アドミニストレーター」
- (2) 第2回 堀川先生 「トップアスリートの栄養学」
- (3) 第4回 麓先生 「スポーツにおける平常心」
- (4) 第6回 木原先生 「スポーツがもつ価値とは What is Sport Values」
- (5) 第8回 赤池先生 「職業としてのスポーツ指導Ⅰ」
- (6) 第11回 田部井先生 「学校、地域社会におけるスポーツ教育の展開」
- (7) 第14回 赤池先生 「職業としてのスポーツ指導Ⅱ」

第1回「日本版NCAA とスポーツ・アドミニストレーター」

担当：碓井外幸

日時：2018年9月5日(水) 4時限

会場：2011 教室

講義演題：日本版NCAA とスポーツ・アドミニストレーター

講師：碓井外幸（人間社会学部）

1. 講義関連

(1) 授業内容

○スポーツをめぐる諸問題

スポーツ界問題ニュース（最近）、問題意識・行動、今後改善すべき問題点、スポーツ医科学の勝利
(例)

○日本版 NCAA 創設事業

「大学スポーツの振興に向けた国内体制の構築」

I. 大学スポーツの転換期到来(1) (2)

II. 日本の大学スポーツの現状(1) (2)

III. 米国における大学横断的・競技横断的統括組織～NCAA (1)～(4)

IV. 大学スポーツが持つ価値・大学スポーツの活性化によるメリット(1)～(3)

V. 日本版NCAA 創設後の日本の大学スポーツの目指す方向性(1) (2)

○平成30年度大学スポーツ振興の推進事業選定大学

東京国際大学、他14大学

○大学スポーツ振興の推進（東京国際大学の取組）

①強化クラブ総括、②企画マーケティング総括、③SEI 事業総括

(2) 授業内容の理解度

- ・スポーツをめぐる諸問題に関しては、大相撲、女子レスリング、アメフト、ボクシング、器械体操などの競技者・指導者によるハラスメントが、新聞、TV、週刊誌などで騒がれたこともあり、多くの受講者が理解していた。
- ・問題意識・行動に関しては、過去から漫然と行われてきている練習・試合中の飲水方法、筋トレの必要性、練習時間の長短問題、炎天・暑熱・降雨・降雪下練習、寒稽古、寒中水泳の安全性と必要性、早朝練習の益・無益、試合前日の食事（ステーキ、トンカツ）の験担ぎ、などの必要・不必要や適切な方法に関して、知識欲が高かった。
- ・今後改善すべき問題点に関しては、ドーピング、体罰、学年差別、性差別、人種差別、メディアによる報道差別、スポーツ活動の年少化・早期化、高校野球（甲子園）の過剰報道などに関心が高かった。
- ・日本版 NCAA 創設事業に関しては、“NCAA”という言葉とそれが米国の大学で行われているという理解程度で、具体的な事に関しては知らなかった。しかし、今後、我が国の大学にどのような影響を及ぼすかについては高い関心を示していた。
- ・平成 30 年度大学スポーツ振興の推進事業選定大学と大学スポーツ振興の推進（東京国際大学の取り組み）に関しては、本学の具体的な取り組みを他大学のそれと比較し、その特徴に対して高い関心を示していた。

(3) 学生の受講態度

- ・他の一般授業と同様に、受講マナーの再確認と最前列から着席するように指示したことにより、私語、飲食などは一切無く、静かに真剣に受講し、必要・重要事項を懸命にメモしていた。

2. 受講者の感想

- ・日本のスポーツ界にも多くの問題（根性論、精神論、厳しい上下関係、不祥事、体罰など）がある事を再認識した。特に、上に立つ指導者の“パワハラ”が気になり、早急の改善を望みたい。
- ・学生スポーツは、学業を優先させながら楽しくやるのが大切だと思った。
- ・世界中の誰もが、何時でも何処でもスポーツを楽しめる環境が整いつつあることから、グローバル化が進む（自分が外国に行かなくても、外国人が日本に来ることもあるため）現在、皆で楽しく実施するには、まず言葉のバリア（障壁）を取り除くための努力が必要であり、その意味においても、外国語、とりわけ英語でのコミュニケーションがスムーズに図れるようにしたい。
- ・日本版 NCAA が創設されたことで、少しずつでも大学スポーツ界の様々な問題が解決されていくのではないかと期待が持てた。また、スポーツ種目により人気の差が大きいので、この活動によって大学スポーツ全体で収入が増えれば、お金をうまく回すことができるようになり、学生の経済的負担が少なくなる（金銭的問題で運動部活動ができないとか、入部しても継続できないなど）のではないかと期待が持てた。さらに、大学と地域のコミュニティが形成されれば、大学のブランド力が上がるだけでなく、過疎化が進む地域の活性化にも繋げられるとの期待が持てた。
- ・この授業は、近隣の他大学が扱えない授業であることを知り、受講できることを大変嬉しく思った。
- ・スポーツに対する知識が競技者、指導者ともに低く、早急に改善する必要があると思った。
- ・この授業を受けるまで米国の NCAA は金儲けだけの組織であると勘違いしていたことに気がついた。しかし、いろんな問題もあることは事実なので、日本版 NCAA はその良いところ取りをして独自のものを作ってもらいたい。

- ・日本版 NCAA の核となる学業優先と安全・安心の精神を、現在のスポーツ指導者にうまく伝え、実施できるかどうか、この事業の成否を決定すると思う。かなりの時間を要するのではないかな？
- ・スポーツをする側からだけでなく、スポーツを見る側、スポーツを支える側からの視点も考慮して、日本版 NCAA を作り上げてほしい。
- ・この講義の内容を、是非、後輩たちにも伝え、間接的であるが日本スポーツ界に貢献したい。
- ・現代社会では、根性論、勝利至上主義、長時間練習などは通用せず、科学の力で身体を鍛えることが大切であることが理解できた。
- ・良い大学は良い学生を呼び、良い学生が出ればさらに良い大学になるといった“好循環”が生まれるということ、再認識した。
- ・現在は発展途上の事業なので、これからの動きが大切であると思う。
- ・この事業により、さらに競技人口が増え、大学スポーツ界が活性化されることを期待している。
- ・この事業では、ただスポーツだけできる人材を養成するのではなく、教育や健康なども総合的に考えることのできる“スポーツ・アドミニストレーター”を作してほしい。
- ・日本のスポーツ問題を改善するにはどのようにすればいいのかを、この授業で勉強したい。
- ・日本版 NCAA の考え方は、大学スポーツだけでなく、私立高校の長時間練習の弊害もあるので、是非、高等学校にも適用してほしい
- ・スポーツをやりながら英語を学べれば、最高にいいのですが！
- ・2時間の練習+勉強で、“甲子園”に行くだけでなく、第一志望の国公立大学に全員合格することができた北陸の進学校の話に、大変興味を持った。

第2回「トップアスリートの栄養学」

担当：堀川 昭子

日時：2018年 9 月 12日（水）4時限

会場：2011 教室

講義演題：「トップアスリートの栄養学」

講師：堀川 昭子（人間社会学部）

1. 講義関連

(1) 授業内容

①スポーツ栄養マネジメントについて（50分）

まずは、スポーツ栄養学とその歴史について簡単に説明したあと、スポーツ栄養学を活用し、アスリートの食生活に全般に関わるスポーツ栄養マネジメントについて解説した。

主なスポーツ栄養マネジメントには、食事や食品の準備と栄養教育があるが、アスリートを取りまく食環境は複雑かつ個々に異なることや食行動を変えることはなかなか難しいことから、スポーツ栄養士等専門的な知識をもった管理栄養士により行われることが望ましい。国際競技力に影響を与える要因として、医科学サポートは大変重要であり、栄養面の支援もこの中に位置づけられる。

その上で、競技パフォーマンスと栄養について現在、わかっている最新情報について紹介した。

②スポーツ栄養マネジメントの実際 (30分)

国内のトップアスリートの栄養マネジメントを行っている国立スポーツ科学センターの活動について紹介したあと、成人のトップアスリートの事例を紹介した。

また、現在、国内で行われているジュニアアスリートの育成における栄養マネジメントや海外のIMGアカデミー等で行われている事例について紹介した。さらに、日本と海外のアスリートの食生活における意識や関心についても体験をふまえて紹介した。

③まとめ

効果的な栄養マネジメントは、アスリートとして目指すべき目標やレベルによって、トレーニングのゴールは異なる。同様に、栄養にもトレーニング同様に戦略があり、個々のアスリートに応じた方法で行っていくことが大切である。また、望ましい食習慣の獲得は、トップアスリートの競技力だけでなく、その後の長い人生にも影響を及ぼすものである。

(2) 授業内容の理解度

①授業内容に理解に関しては、概ね理解していたと思う。特に、スポーツと栄養に深い関係があること、栄養士という職業や栄養士がどのようなことをアスリートに対して行っているのかについて、一定の理解は得られたようである。

一方で、栄養とスポーツがそれほど関係ないと思っていた、知らないことが多かったという意見もあり、スポーツ栄養学やそれを活用した栄養マネジメントについては、知られていないのだと感じた。通常の授業では、スポーツ栄養学とは何か、どのように活用できるのかということよりも、スポーツ選手として知っておくべき知識を伝えることを中心としていたが、少なくとも、今日の授業で感じたことは、そもそもスポーツ栄養学が競技選手にとってどう生かせるのかをまず伝えることのほうが大切であることをあらためて感じた。

(3) 学生の受講態度、授業の様子など

受講態度は大変まじめであり、受講マナーに関しても授業当初に注意をしたため、静かに受講していた。国内外の事例を多く紹介する形で授業を進めたため、分かりやすかったようである。

2. 受講者の感想

食事はスポーツ選手にとって重要な役割を果たすものであり、大切であると感じた学生が多かった。また、国内と海外ではトップアスリートの食生活への意識や関心が異なり、国内は遅れていると感じた人も多かったようである。さらに、今日の講義内容を自身の競技生活に重ねあわせ、どういう点が自分に足りていないのか、また今後どのようにしていきたいかについて記述をしていた学生が多かった。

そもそもスポーツ栄養学はまだ比較的新しい分野であり、国内での実践活動や研究も現在進行形である。スポーツ栄養マネジメントは、あくまでもスポーツ選手の競技力向上を目指し、継続的に、かつ戦略的に行うことが重要であるものの、これまで国内でトップアスリートが受けてきた栄養マネジメントは決して多くはないことから、その内容について知りえる機会も少ない。そういう意味で、今後のスポーツ栄養マネジメントに対する大変さや難しさと同時に、期待感をふまえた感想が多かった。

日時：2018年 9 月 26日（水）4時限

会場：2011 教室

講義演題：「スポーツにおける平常心」

講師：麓 正樹（人間社会学部）

1. 講義関連

(1) 授業内容

① 平常心とは（50分）

まず、平常心の辞書的な定義を確認した。

② 平常心を乱すもの＝ストレス

平常心を乱すものの一つとして、ストレスを取り上げ、ストレスについての定義を、生理学的な観点から整理した。ストレス刺激とストレス反応を主として動物実験の方法などを例に確認した。

③ ストレスが受け流せない状態が続くとどうなるか？

ストレス刺激とそれに対する反応が慢性的に続く状態を問題として、オーバートレーニング、燃え尽き、自殺などとの関連について解説した。自殺については、最近の神経科学の知見を基にした。

④ ストレスを受け流して平常心を維持するには

スポーツ心理学であげられている、リラクゼーション技法の中でも呼吸法を取りあげた。また呼吸法が重視される、ヨガや瞑想などについても、プロスポーツ選手の実践例、最近の学術的な研究、メディアなどの特集、古典的な書物などもとりあげ、紹介するとともに、2分程度の実践も行わせた。

(2) 授業内容の理解度

授業内容に理解に関しては、概ね理解していたと思う。特に、試合前のストレス反応としての緊張が平常心を乱し、パフォーマンスが低くなることを経験している学生が多く、自分の経験と重ねて理解していたと思われる。また、この内容をスポーツの試合との関連だけでなく、自身の授業中の発表時や、将来教員になって子供に指導できる内容として捉えるなど、様々な角度から発展的に考えようとしていたようだ。

(3) 学生の受講態度、授業の様子など（講師の所感）

受講態度は大変まじめだった。数人の遅れてきた学生が私語をやめず強く注意したが、その後は問題なかった。居眠りをする学生もほとんどいなかったように見受けられた。概念的な図表や写真、事例などを多く用いたことがよかったかもしれない。

2. 受講者の感想

平常心を乱す要因としての、ストレスについて深く知ることができたと感じた学生が多かった。ストレス反応への対策のひとつとして呼吸法を取り上げたが、自分自身の競技前、最中の緊張の軽減やコンディショニング（よりよい睡眠など）に役立てたい、また日常生活の中でのイライラ（突発的な怒り）への対応、自分が指導者になった場合の

指導内容のひとつにしたいという感想が多かった。また、これらの背景にあると考えられている、神経機構の内容についても興味を持ったと答えている感想も散見された。平常心の維持はスポーツ場面に限らず、日常生活の様々な場面でも必要とされるので、身近な話題であったことが興味が持てた理由だとした学生もいた。このように、概ね好意的な感想がほとんどだった。

第6回「スポーツがもつ価値とは」

担当：木原 慎介

日時：2018年10月10日（水）4時限

会場：2011 教室

講義演題：「スポーツがもつ価値とは What is Sport Values」

講師：木原 慎介（人間社会学部）

1. 講義関連

(1) 授業内容

①スポーツとは

「Sport」の語源、スポーツの歴史的変遷（古代、近代、現代）、スポーツ基本法におけるスポーツの定義などを通して、スポーツとは何かを捉え直した。

②スポーツがもつネガティブな側面

スポーツのよい部分からではなく、取えてよくない部分（ネガティブな側面）について考えた。ルールがあり、スポーツという文化や科学があるからこそ成立しているものの、そうでなければ非日常的で非道徳的で不健康的で危険なものが多いこと、マーケット対象となりモノ扱いされること、立場的にパワーバランスが崩れやすく暴力やハラスメント、差別や人権侵害などにつながることを確認した。

③スポーツの価値の3つの基盤

IOC が示す「Excellence」「Friendship」「Respect」が基盤であり、それぞれソチオリンピックでの浅田真央選手、ロンドンオリンピックでの水泳日本男子リレー、ソチオリンピックでのガファロフ選手のエピソードを例に挙げて確認した。その他にも、いくつかの写真や研究事例などを紹介しながら、スポーツには多くの価値があることを確認した。

④UNESCO や WADA が示すスポーツの価値

UNESCO が示す「スポーツは公正、協調性、平等、規律、包括、忍耐力、尊敬といった価値を伝えることができる」、WADA が示す 11 の価値、あわせて JADA 作成の映像を確認した。

⑤スポーツへの多様な関わり方

スポーツの価値を大切にすることで、スポーツとの関わり方（する、見る、支える、知る）がより豊かになることを、いくつかの写真、事例、データ資料をとおして確認した。そして、スポーツとの関わり方が豊かになれば、人生や社会により影響を与えること、世界とつながること、未来を創造していくことができることなどを確認した。

⑥スポーツ・インテグリティ

スポーツの価値を保ち、高めるためには、スポーツのインテグリティを守ることが非常に重要になってくるこ

と、スポーツを取り巻く様々な脅威からインテグリティを守らなければ、スポーツの価値は下がり、喪失してしまうことを確認した。

⑦スポーツ・アドミニストレーターに期待されること

以上のことを踏まえて、スポーツ・アドミニストレーターにはスポーツの振興とともにスポーツをとおして人材育成、社会貢献する役割を果たしていくことが期待されることを確認した。

(2) 授業内容の理解度

授業内容はスライドを使ってわかりやすくまとめて提示したり、資料や映像を使ってイメージを持たせたり、プリントへの記入、発問、話し合いや発表などを取り入れてインプットしやすい状況を作ったりしながら進めたため、概ね理解しやすかったのではないかと感じる。

(3) 学生の受講態度、授業の様子など

授業開始する前に、各回の共通事項である基本的授業ルールやマナーを再確認したため、スムーズに授業に入ることができた。また、上記(2)のように授業を進めたため、学生の取り組み態度についても、飽きさせることなく概ねよかったと感じる。

2. 受講者の感想

学校体育、学校部活動、地域や民間のスポーツクラブなどをとおして幼少期からスポーツを続けてきている履修学生がスポーツそのものに対してどのように考えているかがわかった。総じて、狭義的な捉え方だったり、限定的な関わり方だったりが多く、プレイヤーとしても指導者としてもその他の関わり方にしても、現在のままでは勉強不足であることに気付くことができた様子であった。以下、学生のコメントより。

○今までスポーツは楽しく競い合ったりするものだと考えていたが、人とのコミュニケーションを作り上げたり、仕事として世界と繋がったりなど価値が本当に多い一つのカルチャーだということが分かった。

○スポーツを通して社会貢献する活動に興味があり、発展途上国へ行って活動してみたいという思いがより強くなった。

○スポーツのデメリットを初めて考えた。それなのに自分はなぜスポーツを続けているのか考えさせられ、自分のスポーツの取り組み方について見直すことができた。

○すごくストンと心に落ちたというか、鳥肌がたった。確かにネガティブ面をあげたらきりがないが、スポーツをやっている歓声やその場所に立るという素晴らしさ、高揚感を味わったことがある人はよく分かるというか、理解しやすかったというか、何かよくわからない感情が湧いてきた。スポーツの価値は無限だ。

○初めてパラリンピックの映像を見た。とても短い映像だったが涙が出そうになった。障害があるからということなどは一つも見えなくて、それ以上に自信あふれた姿が人々を感動させる。

○スポーツの価値があまり浮かんでこなかった。スポーツの指導者はしっかり学んでいかないと、離れて行ってしまいう人が増えてしまいそう。

○運動やスポーツが大好きで指導者になりたいが、今の状態では何も教えられないと気付かされた。スポーツの価値やスポーツ・インテグリティについて、これからもっと学んでいこうと思う。

○多方面から色々な角度でスポーツについて見ていくと、更に成長できると感じた。これからもより深く、広く、スポーツと向き合っていこうと思う。

第8回「職業としてのスポーツ指導1」

担当：赤池 行平

日時：2018年 10月 31日（水）4時限

会場：2011 教室

講義演題：「職業としてのスポーツ指導1」

講師：赤池 行平（人間社会学部）

1. 講義関連

(1) 授業内容

【スポーツ指導を職業として活動する際に必要なこと】

- ①心得
- ②資格
- ③体力
- ④立居振舞い

選手時代も含めると計20年以上、スポーツ現場の第一線で活動した担当講師の経験から、「スポーツ指導」を生業としていく場合に不可欠な要素を学生に伝えた。ともすると、「知識」や「技術」に走りがちな若い世代に対して、その能力は最低限持っていて当たり前のものであり、それ以前に大切なこととは何かを、事例を出しながら説明した。

(2) 授業内容の理解度

回収したレポートから判断すると、参加者の多くが非常に興味を持って聞いていたと感じている。当初は、その前週に古田敦也氏の講演であったため、私の話には関心が無いのではないかと思っていたが、古田氏の話よりも私の話の方が、学生にとっては現実に近いものであるため、参加者の関心の高さを感じながら話すことが出来た。

学生の受け取り方も、私が伝えようとしたことに概ね則しており、誤って伝わってしまった部分は少ないと思われる。話の冒頭では、一番の重要な要素として考えている、「指導者こそ常に見られている」という意識を持つことの重要性を説いた。反応から、その点に関して学生たちの新たな知見となってくれることを期待している。

(3) 学生の受講態度、授業の様子など

私語もなく、関心の高さを感じながら話すことが出来た。もう少し、学生からの質疑応答の時間を取ればよかったが、レポート作成に時間を取ったため、学生との意見交換が出来なかった。今後の反省点としたい。

2. 受講者の感想

- ・立居振舞いを意識して行動しようと思った。
- ・ただトレーニング指導をする、身体のケアをする、だけでは全く通用しないということを感じた。
- ・指導者は自分自身を「商品」として、お客様をもてなす気持ちが大事だと感じた。「自分が目立つ」職業ではない

ことがわかった。

- 普段から学んで実践することや、堂々とした姿勢などの振る舞い方、体力を維持向上させることなど、自分も向上しないと手本を見せたりできないし、選手に不安をもたらすと思ったので、体力は言動も気をつけたい。
- 責任の違いを痛感した。技術向上や勝敗、ケガ、結果は全て指導者の責任になるということから、その責任を負う覚悟が必要だと感じた。
- 指導者の精神状況、または本気度などが、より良い指導に繋がるのだとわかった。
- 良い指導者になるためには、知識やライセンスが豊富なことではなく、今までの経験や振る舞い方、行動により、選手にも影響を与えるということがわかった。
- 今までは、指導者はただ技術を教える人だと思っていた。しかし、今日の講義で指導するための4つの要素が重要であることがわかった。技術や知識があることは当たり前であり、特に心得と立居振舞いは考えていなかった。相手のことを考える重要性を知ることができた。
- 資格取得はスタート地点に立っただけであり、実際に現場でクライアントや選手と対面してみても初めて得る知識も大事だということがわかった。
- スポーツの指導者は、指導するだけではなく、競技者やクライアントに信用してもらいために実践も出来なくてはならず、大変な職業だと思った。身体だけでなく、メンタルコントロールまでこなすとは素晴らしいと思う。私自身もスポーツ系の資格を取ろうと思っていたのだが、なかなか大変で知らないことばかりだったので、良く調べてみようと思った。指導者になれた際には、この講義で聞いた内容を活かしていきたい。
- 私の指導者のイメージは、元プロなどの経歴がある人というイメージだった。しかし必要なのは、経歴ではなくクライアントや選手への接し方、立居振舞いの方が重要だという事がわかった。
- お客さんを説得するために、自分も強化していく必要があるのだと知り、日々のトレーニングの大切さに気付くことが出来た。
- 自分の指導者像は、選手の技術を向上させ、常に身体を良い状態にキープするのが、指導者だと思っていた。そこには「責任」という言葉はほとんどなかった。今日の話聞いて、資格は指導者自身の品質提示であり、お客様に示す義務がある。そこでお金をもらうのであるから、責任を持たなくてはならないという事を学ぶことが出来た。

第11回「学校、地域社会におけるスポーツ教育の展開」

担当：田部井 潤

日時：2018年 11月 21日（水）4時限

会場：アネックス1階旧食堂

講義演題：「学校、地域社会におけるスポーツ教育の展開」

講師：田部井 潤（人間社会学部）

1. 講義関連

(1) 授業内容

①スポーツイベントの企画・立案（60分）

強化クラブのメンバーを中心とした小グループ（4名ないしは5名）を形成し、各クラブの内部資源を活かした、学生の視点から、スポーツイベントの企画と立案を試みる。学び方としては、グループワークを利用したアクティブラーニングを用いた。

学習課題としては

1. 時間内に課題を遂行すること
2. 他者と協働・協力して、課題に取り組むこととした。

②スポーツ・アドミニストレーターに必要とされる能力と自身の課題（20分）

本日の課題作業を通して、スポーツ・アドミニストレーターに必要とされる能力・技能と現在の自身の能力・技能との違いに気づかせるための自己分析をレポートで試みた。

学習課題としては

1. 自己分析能力とした。

(2) 授業内容の理解度

①授業内容に理解に関しては、学生の各グループから提出された「大学スポーツイベント企画書」を見る限り、予想された通り初学者レベルであると判断できる。すなわち、「大学スポーツイベント企画書」では、実行不可能な企画や不十分な事業内容、記述内容における齟齬（自己矛盾）等が見受けられる。この原因は、本授業の履修者の大半が大学1年生であるため、スポーツ事業全般に対する知識、イベントの立案や企画の対する知識そしてマーケティングや組織論等に関する知識等の未履修によるものと思われる。

しかしながら、本授業の学習課題である、「時間内に課題を遂行すること」と「他者と協働・協力して、課題に取り組むこと」に関しては、学習経験できたと考える。その理由は、課題をすべてのグループ（24グループ）が時間内に提出できたこと、並びに授業時間中の退室並びに課題に関係しない行動をしている学生は確認できなかったからである。

本授業では、グループワークといった学び方についての学生の経験が乏しく、作業をうまく運営できないグループが幾つか見受けられた。しかし多数のグループでは、積極的に話し合い企画を立案していた。この点から、これ

までの大学教育とは違う学び方を学生に学ばせる必要性も感じた。

②授業についての感想ではなく、客観的に自己をとらえ自己分析できる能力を試した。レポートを見る限り、全般的には、この必要な能力を十分に備えていないか、自分自身を客観的に評価する経験が乏しいのか、また課題があるように思われる。

しかし、課題を通して、客観的に自己能力を分析している学生も多く見られる。その詳細は、後述する。

(3) 学生の受講態度、授業の様子など

受講態度は大変まじめであり、受講マナーに関しても授業当初に注意をすると、素直に従った。グループワークが主体である授業なので、グループごとに運営の仕方に差が出てしまう。作業を進める際に受講生たちが抱える疑問に対して教授者側がうまく対応してそれを解消できたグループでは、順調に作業が進んでいた。また、リーダー等の不在によりまとまりのないグループでは、作業自体がおざなりになっていた。

2. 受講者の感想

教授者が意図した課題とは違った記述が見られた。前述したように、本レポートの課題としては、グループワークにおける自分の現在の能力に関する自己分析（ふりかえり）を主題にしていた。

しかしながら、単にグループワークの進行状況を記載したのも幾つか見られた。

反対に課題を的確に捉え、グループワークでの経験から自分自身の問題点を的確に捉えた回答も見られた。以下、回答例を幾つかあげる。

「スポーツイベントを企画するうえで、私は様々なスポーツへの知識や経験が足りないと思った。1つのスポーツではなく、様々なスポーツへの知識がもっとあればたくさんの意見が足せたと思う。」

「企画書を作るのに私に足りなかったのは、発想力と発言力だと思った。何をどうすれば人が来てくれるのか、楽しんでもらえるのか、を考えることができなかった。」

「チーム全体でコミュニケーションを上手くとることができなかった。知識や発想力の面で、わからないことは人に頼ってしまっている部分があった。グループワークの大切さやコミュニケーションの重要性を理解しました。」

第14回「職業としてのスポーツ指導2」

担当：赤池 行平

日時：2018年 12月 12日（水）4時限

会場：2011教室

講義演題：「職業としてのスポーツ指導2」

講師：赤池 行平（人間社会学部）

1. 講義関連

(1) 授業内容

学生スポーツ指導のあり方について

～「帝京大学ラグビー部」の事例から学ぶ～

全国大学ラグビー選手権9連覇を達成した帝京大ラグビー部の事例を、NHKBSの番組録画を見ながら考える。大学体育会にありがちな古い体質を打破し、「脱体育会」を掲げながらも前人未到の9連覇を達成した部活動の実態に迫る。今回担当した私自身も、高校・大学と野球競技の一線で競技者として活動しており、特に大学時代は「エンジョイベースボール」を掲げる慶応大野球部に所属し、映像に映し出された帝京大ラグビー部に近い雰囲気でも過ごした経験がある。その経験も話しながら、学生に「本来あるべき運動部の姿」を考えさせることを狙った。

(2) 授業内容の理解度

回収したレポートから判断すると、非常に興味を持って聞いていたことが感じられるが、レポートに書く内容が難しかったためか、あるいは本学の学生が精神的に成熟していないためか、記述内容に「濃さ」が感じられなかった。大半が、「理想的だ」、「このような部活動を目指したい」といった、ありきたりな見解が多く見られた。確かに、レポート記入の時間も15分間弱といった短いものであったが、大学スポーツの問題が多く取り沙汰される昨今において、帝京大ラグビー部の実態にせまる映像を見て、考えなければ何も書けないような問題意識の低さは、少し残念であった。もっと、自分自身の経験を踏まえて、このような体制についてくるメリットやデメリットに関する見解、あるいは否定的な意見などが、よどみなく書けるほどの意識が欲しいと思う。

(3) 学生の受講態度、授業の様子など

私語もなく、受講態度は良いものであった。しかし、レポート記入にかかる時間が極端に短い学生が散見されたが、このような映像を見ても何も感じないような学生には、もっと多くの情報を提供し、理解を深めてもらいたいと考える。

2. 受講者の感想

- ・自分の部活でも取り入れて欲しいと思った。
- ・Have toではなく、Want toで動く組織を、指導者として作りたい。
- ・自分の意見を言えて、人を動かせるリーダーになりたい。
- ・人に動かされるのではなく、人を動かせる人がチームにたくさんいることが、強くなる最大の武器だという事がわかった。
- ・帝京大ラグビー部が強いという事は知っていたが、脱体育会系だという事は知らなかったので、驚いた。自分がトレーナーになった時には実践したいと思った。
- ・高校時代の部活で、上級生が下級生の意見を聞くようにしてから、勝ち上がり、成績も良くなった経験があった。それを思い出した。
- ・高校時代、下級生に意見を行ける風潮を作ったら、それが高じて上級生が舐められるという状況になった。そうならないようにするためにも、上級生の態度が重要であると感じた。
- ・高校時代に、この帝京大ラグビー部のような部に所属していたが、一人一人がリーダーという意識でやると、本当にチームが良くなるという事は実感している。
- ・このような体制は素晴らしいが、すぐに出来るものではなく、ある一定の時間と労力が必要だと考える。
- ・コミュニケーションの必要性を感じた。先輩が後輩をきちんと導いていくために、やはりどのように伝えていくかということが大事だと思った。

「スポーツ・アドミニストレーション入門」講義所感（フォーマット）

担当：〇〇 〇〇

日時：2018年 月 日（水）4時限

会場：2011 教室

講義演題：「 」

講師：〇〇 〇〇（人間社会学部）

1. 講義関連

(1) 授業内容

①

②

③

(2) 授業内容の理解度（講師の所感）

(3) 学生の受講態度、授業の様子など（講師の所感）

2. 受講者の感想（授業レポートから抜粋）*良いものを中心。授業に対する問題点、要望等もあれば。

「スポーツ・アドミニストレーション入門」特別講師による所感

SA 入門では、全 15 回のうち 7 回を特別講師により講義を行った。以下に各講師の所感をまとめた。総じて、講義のテーマについては大きな関心をもっていると感じられる一方で、口頭での質疑に関しては積極性がみられないことや、その時間が不足していたことなどが挙げられている。

第3回（9月19日）	佐藤 直子 氏	「スポーツ国際大会の開催」
1) 学生に伝えたかったこと		
<p>スポーツ大会をどのように企画運営するか。一つの大会を行うのにも、周囲の様々な人々の協力と大変な努力があって成り立っている。プレイヤーとしては、ただの勝負だけではなく、そういう側面も理解しながら感謝の気持ちをもってプレイしてほしいし、その運営面の面白さについても知ってもらいたかった。また、トッププレイヤーの隠された姿（裏面）についても伝えたかった。</p>		
2) 授業を終えた感想		
<p>学生はよく聞いていたと思う。質問が出なかったのは残念である。</p>		

第5回 (10月3日) 第7回 (10月17日)	古田 敦也 氏	「激動の時代を生き抜こう」 「持続可能なスポーツ社会」
1)学生に伝えなかったこと		
<p>情報社会であるが故に、未来を予測し悲観する若者が多いと言われている中で、自分の可能性を信じて欲しいというメッセージを送った。また、スポーツには人を感動、興奮させる大きな力があると思うが、景気などに左右され、定着できない社会がある。そこで、「持続可能なスポーツのある社会にするために何ができるかを考えてみてほしい。」ということ伝えた。</p>		
2)授業を終えた感想		
<p>最初は遠慮気味で受動的な受講態度であったが、途中から前向きな姿勢にかわり、質問の内容からして、彼らにいろいろなアイデア浮かんできたように見受けられた。</p>		

第9回 (11月7日)	三宅 義信 氏	「オリンピックの意義」
1)学生に伝えなかったこと		
<p>まずは講義のテーマであるオリンピックの起源や理念について。それを踏まえて、大学は自由な時間が多いからこそ、いろいろなことを考え、実行し、進むべき方向性を定めていく重要な時。自分自身の経験的にも、いまこの時しかない大切なことだと考えている。</p>		
2)授業を終えた感想		
<p>全体的に目が輝いている学生が多かった。スポーツは特に礼儀や秩序などを重視することもあり、聞く耳をもってくれたかと思う。もう少し質問時間があればよかった。多くの経験を持っているので、どんな質問にも答えられたと思う。もしまたこのような機会があれば、ぜひお願いしたい。</p>		

第10回 (11月14日)	宇津木 妙子 氏	「スポーツによる国際貢献」
1)学生に伝えなかったこと		
<ol style="list-style-type: none"> ソフトボール (競技) を通して、海外で普及活動を行いながら、その国の生活習慣、環境等を知ることが出来、今後の人生に活かせること。 各国の文化、風土、人の違いがある中、ソフトボールという競技をとおして人と人との繋がり・交流を図ることが出来ること。 国際貢献は現地の方と一緒に、その国の良さを活かし、共に発展しながらお互いの良い所を共有して行くことなど、私の経験・体験を学生に伝え、今後の人生の道標になることを望む。 世界の中でも日本はいろんな意味で豊かな国だと思うが、この豊かさに甘えることなく日々生活して欲しいこと。 国際貢献をする中、海外に出向き、海外の子供と接する中、子供たちから多くを学ぶことが多い。具体的には、「生きる力」「たくましさ」など。 *アフリカ等の発展途上国では、泥水 (浄水されていない水) を飲んで生活することが当たり前の光景も目にした。 目的意識、目標・夢を持ち、努力することの大切さ、失敗を恐れずに、取り組むことの重要性を伝えた。 		

2)授業を終えた感想
<p>先ずは、全体的に学生が真剣に聴講してくれていたと感じた。そして、質問もしっかりしている、すなわち、問題意識を持って生活し、今後の事を考えているのだなと感じた。更には国際貢献をしたいという学生の声を聴き、これらの芽を育むことなく具体的に活動できる授業（仕組みづくり）があったら嬉しいと思いました。</p>

第12回 (11月28日) 第13回 (12月5日)	大原 伸 氏	「アメリカ大学スポーツ事情」 「スポーツマネジメント」
-------------------------------	--------	--------------------------------

1)学生に伝えたかったこと
<p>「スポーツマネジメント」では概論や一般論にこだわらず、現実的なスポーツ界のエージェント業務、マネジメント業務の生々しい現実をお伝えしました。一人の人間が市場そのものを動かしていく様子をきっちり伝えたかったです。また子供たちに正しい金銭感覚を知ってもらおうというのも大事な目的ではあります。</p> <p>「日米大学スポーツ比較」では広い意味でのスポーツに対する感覚の違いと、NCAAの良し悪しをシューズ産業という普通と違う視点からお伝えしました。普段何気なく使っているシューズや何気なく見ているスポーツに新しい目線を送り込めればと思いました。刺激は強い話だったかもしれませんが、なにか心に刺さってくれば、と思います。</p> <p>またどちらの講義でも、スポーツはプレイヤー以外の人物が大きくかかわっていることも今回伝えたかった大きなテーマです。</p>

2)授業を終えた感想
<p>想像された通り、今回の講師陣の中ではマイナーな存在だったため、序盤こそアウェー感が出ていましたが、1回目の講義の途中、やはり刺激的な話になるにつれ、興味深く聞いてもらえて良かったです。感想を見ても、伝えようと思っていたことが伝わっていて安心しました。</p>

「スポーツ・アドミニストレーション入門」特別講師所感（フォーマット）

第 回（ 月 日）	講師氏名	講義タイトル
1)学生に伝えたかったこと		
2)授業を終えた感想		

資料3：第1回ミーティング

平成30年度SEI事業総括第1回ミーティングは平成30年10月24日（水曜日）16：30～行われ、阿部、碓井、木原、田中、鄭、麓のスタッフによって行われ、1) 大学スポーツ推進事業、UNIVAS、本学の採択テーマ、およびSEI事業総括について、2) 「スポーツ・アドミニストレーション入門」と「English comprehension II および Communication basic II」について、3) 報告書作成について（役割分担）、4) SEI事業総括による国際スポーツ・アドミニストレーターの育成について「短期および長期計画」、の主として3点について議論がなされた。

資料4：第2回ミーティング

平成30年度SEI事業総括第2回ミーティングは、平成30年11月19日（月曜日）17：30～、阿部、碓井、木原、田中、鄭、麓によって行われ、1) 本年度報告書作成に向けた業務の途中経過報告、2) 次年度英語授業の内容に関して、GTIであるジョージ・ヘイズ先生のゼミでのゴルフ授業内容、の主として2項目について議論がなされた。



資料5：第3回ミーティング

平成30年度SE事業総括第3回ミーティングは、平成30年12月3日に、阿部、碓井、木原、田中、鄭、麓によって行われ、1) SEI 事業関連英語科目について、① 大学等で行われているボランティア関連情報について、神田外国語大学「スポーツ通訳ボランティア」の取り組み、「グローバルアスリートプロジェクト」、順天堂大学の日本版NCAA 事業についての情報提供があり、2) 英語科目 (English comprehension II および Communication basic II) アンケートの修正版について、の主に2項目について議論がなされた。

資料6：受講者アンケート

スポーツ・アドミニストレーション入門 アンケート

以下を記入し、あてはまる所に○を付けて下さい

学年：1年・2年・3年・4年 性別：男・女

学部_____・学科_____

主とする専門競技：_____ ・ 競技経験年数：_____年

Q1. この授業の中で興味・関心をもてた内容に○を付けてください。(複数選択可)

<input type="checkbox"/>	「ガイダンス 日本版NCAA、スポーツ・アドミニストレーター」 確井外幸
<input type="checkbox"/>	「トップアスリートの栄養学」 堀川昭子
<input type="checkbox"/>	「スポーツ国際大会の開催」 佐藤直子
<input type="checkbox"/>	「スポーツにおける平常心について」 麓正樹
<input type="checkbox"/>	「激動の時代を生き抜こう」 古田敦也
<input type="checkbox"/>	「スポーツがもつ価値とは」 木原慎介
<input type="checkbox"/>	「持続可能なスポーツ社会」 古田敦也
<input type="checkbox"/>	「職業としてのスポーツ指導1」 赤池行平
<input type="checkbox"/>	「オリンピックの意義」 三宅義信
<input type="checkbox"/>	「スポーツによる国際貢献」 宇津木妙子
<input type="checkbox"/>	「学校、地域社会におけるスポーツ教育の展開」 田部井潤
<input type="checkbox"/>	「アメリカ大学スポーツ事情」 大原伸
<input type="checkbox"/>	「スポーツマネジメント」 大原伸
<input type="checkbox"/>	「職業としてのスポーツ指導2」 赤池行平

Q2. 以下の3つの質問に対し、それぞれ右枠の1-5の該当する所に、1つ○をつけて下さい

	全くあてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	非常に強くあてはまる
(1)「スポーツ・アドミニストレーター」に興味・関心を持ちましたか？	1	2	3	4	5
(2)今後のあなたのスポーツ活動につながる(役立つ)内容でしたか？	1	2	3	4	5
(3)総合的にみてこの授業は満足でしたか？	1	2	3	4	5

Q5. この授業を通して、今後、どんな内容を深く学びたいですか？

(例：○○さんの話が聞きたい。この分野について深く知りたい。など)

Q6. その他、授業の改善点や疑問・質問などがあれば、自由に書いてください。(何でも構いません)

以上です、ありがとうございました。

English Communication II / Communication Basic II アンケート

以下を記入し、あてはまる所に○を付けて下さい

学年：1年・2年・3年・4年 性別：男・女

学部 _____ ・ 学科 _____

所属部： _____ ・ サークル（種別） _____ ・ 所属なし

Q 1 以下の2つの質問に対し、それぞれ右枠の1-5の該当する所に、1つ○をつけて下さい

	全くあてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	非常に強くあてはまる
(1) この授業では、授業内容と、英語を必要とする仕事との関連を考える機会が多くあった	1	2	3	4	5
(2) この授業では、授業内容と、スポーツが関わる運営/管理の仕事との関連を考える機会が多くあった	1	2	3	4	5

Q2 あなたが、この授業を履修した動機を教えてください（どの様な理由で授業を受けようと思いましたか？）

Q3 英語を活用できるスポーツが関わる活動には、どの様なものがあるでしょうか。あなたが思いつくものをできるだけ多く挙げて下さい

以上です、ありがとうございました。

スポーツ・アドミニストレーション入門 アンケート結果と考察

今回のアンケートは、回答数 92 名。アンケート結果から受講者の大半が、スポーツ経験者であった。サッカー、テニス、バスケットボール、野球など球技系経験者が多く受講している。スポーツ経験のない学生は 3 名のみであった。「スポーツ・アドミニストレーター」について約 9 割の学生が概ね理解ができているという結果となり、今後の活動に役立つとても満足な内容であったと感じている学生が多かった。

特に興味深かった内容については、古田敦也氏、宇津木妙子氏など著名な講師による講義のほか、スポーツビジネス、スポーツマネジメント、スポーツトレーナー、栄養学、他大学の取り組みについてなどが挙げられ、今回含まれていた内容を今後もさらに詳しく聞いてみたいという意見が多くみられた。

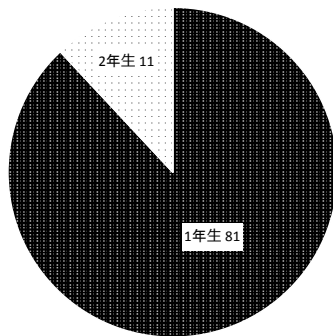
その他では、サッカー競技経験者が多く受講していたこともあり、サッカーの指導者や選手、有名選手の話が聞きたいという意見や、スポーツ分野で活躍している有名人の話を知りたいという意見が多かった。

全体的な傾向として、「とても勉強になった」、「自分のためになる授業であった」、「様々な面からスポーツを学ぶことができた」「スポーツについての幅が広がった」などポジティブな意見が多く、さらに深く学びたいという意欲を感じる意見が多くみられた。一方で、「他のスポーツ競技の話を知りたかった」、「もう少し教育面から見たスポーツについて知りたかった」などの意見もあがっており、今後の内容検討に活かしていきたい。

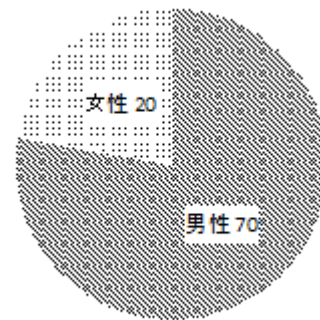
本講義は、学生の興味にあった内容で構成されているといえる。しかし、「スポーツ・アドミニストレーター育成」という本質的な面からみると、資格取得への制度理解や具体的な対策に関する現状を精査する回答を求めている点は、今後の課題といえる。

回答者（受講者）の属性

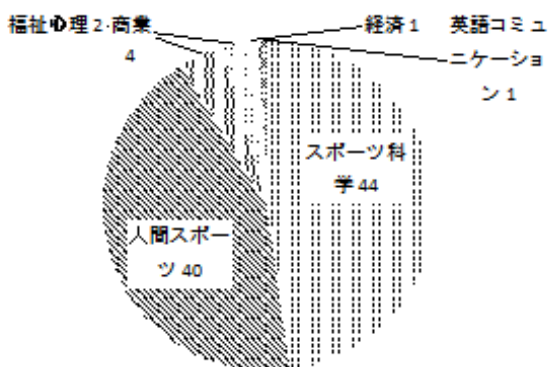
・学年



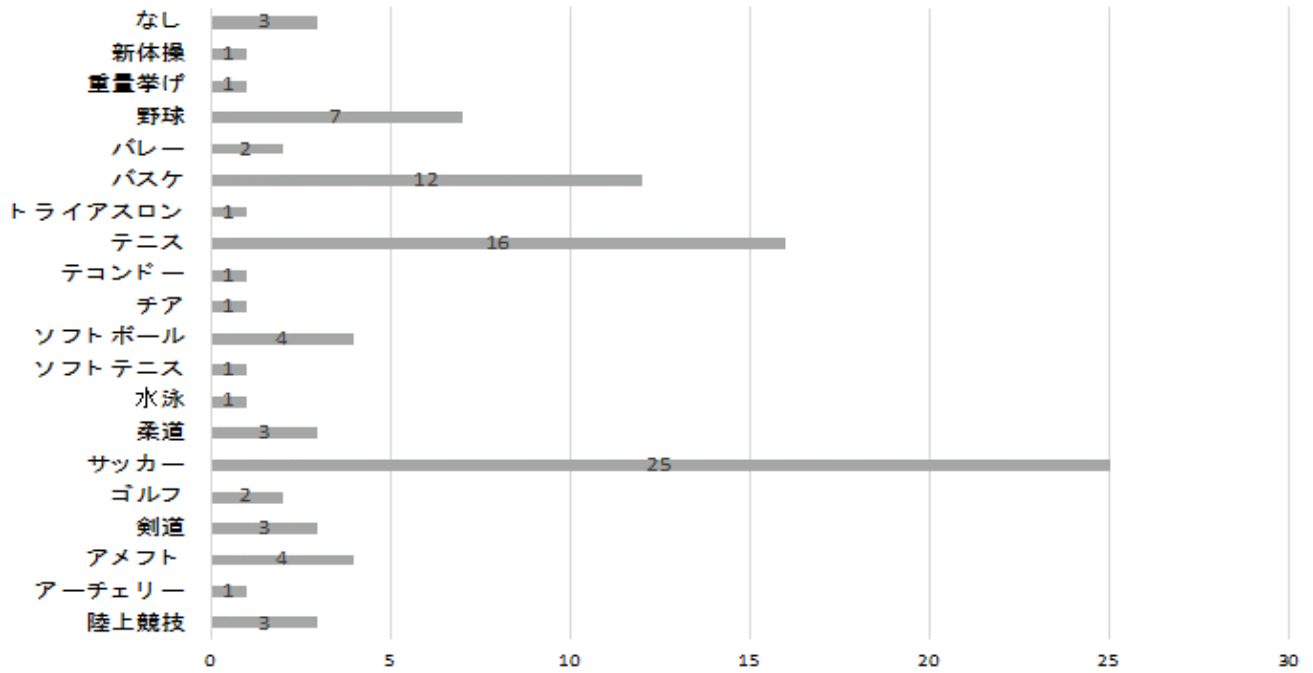
性別（不明 2 名）



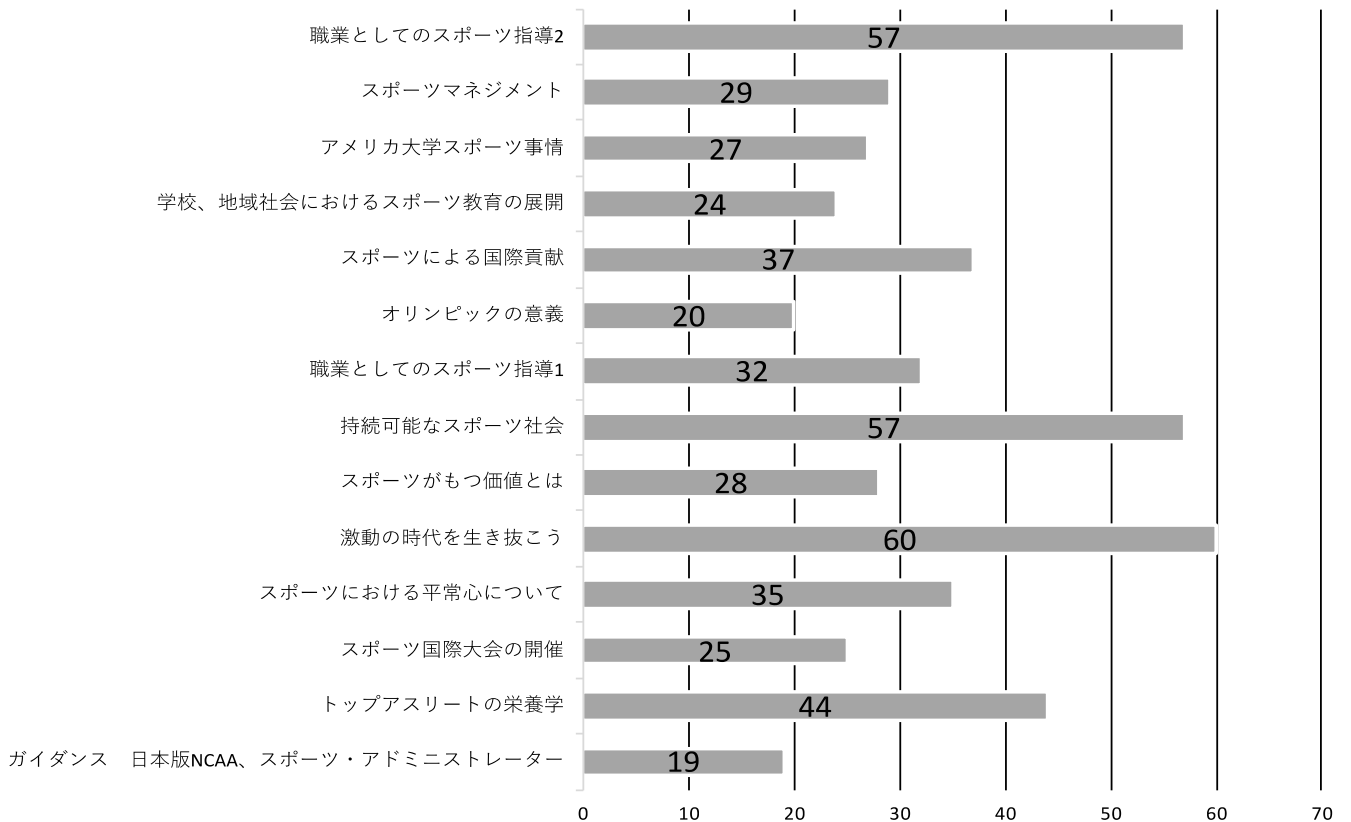
学部・学科



主とする専門競技

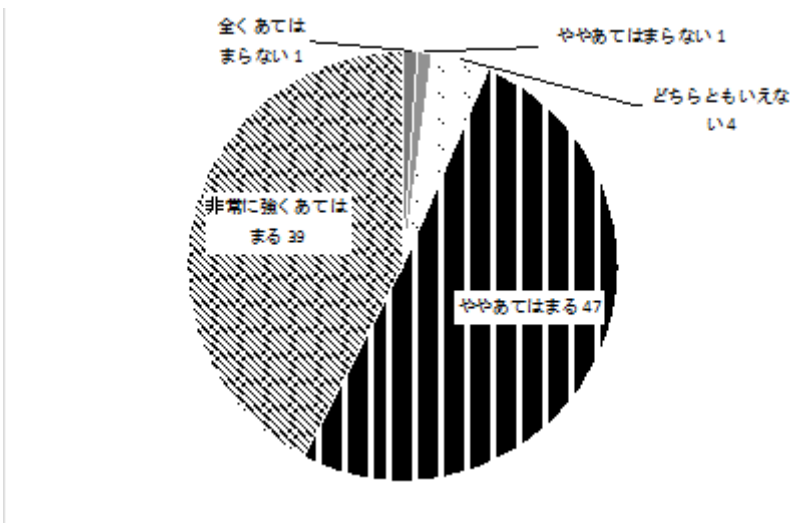


Q1. この授業の中で興味・関心をもてた内容に○を付けてください。(複数選択可)

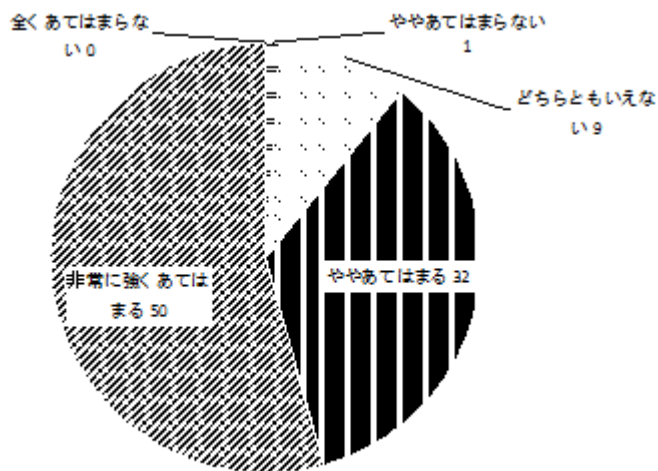


Q2. 以下の3つの質問に対し、それぞれ右枠の1-5の該当する所に、1つ○をつけて下さい

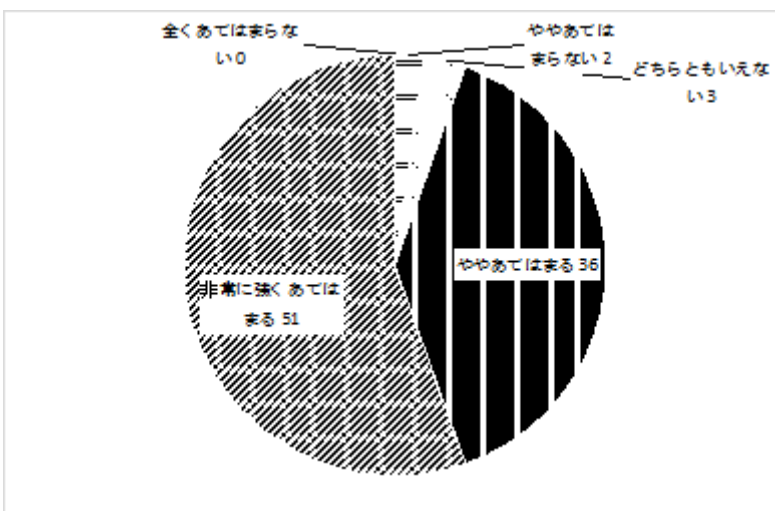
(1) 「スポーツ・アドミニストレーター」に興味・関心を持ちましたか？



(2) 今後のあなたのスポーツ活動につながる(役立つ)内容でしたか？



(3) 総合的にみてこの授業は満足でしたか？



Q3. この授業を通して、今後、どんな内容を深く学びたいですか？

(例：〇〇さんの話が聞きたい。この分野について深く知りたい。など)

スポーツビジネス

大原さん、スポーツのお金の動き

大原さんのマネージャーについて詳しく知りたいです。

スポーツビジネスについて

大原さんのスポーツマネジメントの会社の事について聞きたいです。・スポーツ国際についても学びたいなと思いました。

大原伸さんの金に関することに興味があるので深く知りたい。

大原先生のスポーツマネジメントについて学びたいと思う。特に選手によりそう環境をつくることについて学びたい。

「スポーツマネジメント」に興味をもったので、もう少し知りたいと感じた。

大原伸さんのNBAの話がもっと聞きたいです。

大原さんのスポーツマネージメントについてとても学んでみないと話を聞いて思いました。また職業としてのスポーツは自分自身が目指していることなので深く学びたいです。

大原さんの話は、とても興味があった。サッカーのトレーナーに関する話もききたかった。

スポーツマネジメントについて深くもっと知りたい

将来的にスポーツマネジメントなどの分野について深く知っていき、海外ボランティアなど自分が今、興味を持っている事に、行って挑戦していきたい。

古田さんの話をもっと聞きたいです。

古田敦也さんの話が聞きたいです。どれだけ練習したのか。

古田敦也さんの話をもう一度聞きたいです。サッカーの専門的な事や裏側も知りたいです。

古田敦也さんの野球の話がもっと聞きたいです。

古田さんの話をもっと聞いてみたいと思った。とても説得力があり、とても役に立ちそうな話だった。

赤池さんの話が聞きたいです

赤池さんのスポーツトレーナーとしての話を深く知りたい

スポーツトレーナーについて

帝京ラグビーについて

帝京ラグビー部の監督の講義というのを生で聞いてみたいと感じた。

最後の赤池先生の授業に関心もちました！！他のチーム、大学のスポーツについてもみてみたいです。

トレーナー分野について知りたい。

トレーナーになりたいのでスポーツにおけるトレーナー事情をききたい。

スポーツトレーナーの話をもっと聞きたい。日本代表のトレーナーの方や、プロ野球のトレーナーなど

「職業としてのスポーツ指導 2」をもっと知りたいと思った（他のスポーツの指導者はどうしているのか？）野球だったり、サッカー、駅伝など…

堀川先生の栄養学

スポーツ栄養学について学びたい。

「スポーツ栄養学」を学びたいと思った。

堀川先生の栄養学

トップアスリートのコンディショニング・栄養学について学びたい。

栄養学について深く知りたい。

栄養学的な授業をしてから、栄養面で自分的に管理をし始めたりしました。

スポーツによる国際貢献の分野についてもっと学びたいです。(語学系学部所属しているので興味があるから。)

宇津木先生のお話をもっと深く知りたい。

宇津木さんの話が聞きたい

ソフトボール

麓さんのブレイントレーニングについてもっと深く知りたい。

麓先生の平常心ではすごく関心をもち深く知りたいと感じたしスポーツには重要だと思った。

【今後聞きたい人】

松岡修造さんのお話を聞きたいです。どうかお願いします。本当に聞きたいです。

現在、スポーツ選手として活躍している人の話が聞きたい。(スポーツに関わっている人も) ex) 北島康介、松田丈志

サッカー選手の話が聞きたい

ネイマール、ダ・シウバ、サントス、ジュニオール選手の話聞ききたい

今までプロの選手として戦ってきた人の話を聞ききたい。剣道、水泳

井上康正さんの話が聞きたい

武井壮氏の話が聞きたい。トレーニング方法を知りたいと思った。

大手企業の社長さんの話が聞きたい。

松山さん(ゴルフ)

室伏広治さんのお話が聞きたい。

帝京ラグビー部の岩出さんのお話が聞きたい。ラグビーではなく、教育面、コーチング等について深く知りたい。

青学の原監督 青学のチーム作りについて知りたいです

野村克也さんのお話が聞きたい。特にチーム改革や指導法について。

野球選手の落合博満選手、桑田真澄選手のお話を聞いてみたいと思う。

様々なトップアスリートのお話が聞きたいです。現役の方のお話が聞きたいです。

最近のオリンピックメダリストのお話を聞きたい。

サッカー選手の話

有名な現役選手のお話を聞ききたい。

健康運動指導士、スポーツトレーナーとして働いている人の話が聞きたい。

【その他】

スポーツやトレーニングの、基礎知識を学びたいです。

今後、指導者になりたいので、指導者の方、競技者（選手）に話を聞いて見たいです。

スポーツ指導

スポーツと医学のかかわり

もっとアスリートからトップアスリートとして生きていく中で必要なこと

将来どのようにスポーツしていくか、今どのように楽しむか考える

オーバーワーク防止、新しい指導者の概念

社会とスポーツとのかかわり方もそうだがもっと専門的なこと、(乳酸について)

三宅先生の話しをもっと多く聞きたい。

スポーツにおける平常心についての分野についてもっと深く知りたい。

スポーツ競技を行うにあたり、自分が強くなるために、どうすればよいかもっと色々な知識を得るために学んで行きたい。

自分の競技に関するお話や、それにつながるメダルや、けがしたときの乗り越え方など、ききたい。

スポーツ心理学について深く知りたい。

Q4. その他、授業の改善点や疑問・質問などがあれば、自由に書いてください。(何でも構いません)

もっと他のスポーツの話を知りたい。

もう少しメンタル的な授業をお願いします。

グループワークを増やすのもありかなと思います。

有名人もっと来てほしい…

スポーツについての幅がひろがった

もう少し教育面から見たスポーツについて学びたい。

スポーツを様々な面から学ぶ事ができた。

アドミニストレーターについて色々知りたかった。

この大学の先生ではなくもっと他の有名な監督や選手から話を聞きたいです。

ビデオ学習をもっと増やすべき

とても勉強になりました。

やはり、実績を持った方の話は特に、自分がどうして強くなれたのかなど、スポーツ競技をするに当たって必要な知識を学べてとても良い機会となりました。

自分にとって、すごくためになる授業で、たくさん自分のものにできた。

もっとうけたかった

English Communication II/Communication Basic IIアンケート結果

協力者について

今回の調査では、3名の協力者から回答が得られた。協力者の内訳は、いずれも男性、1年生で、人間スポーツ学科が1名、スポーツ科学科が2名であった。さらに運動部に所属する学生は、1名であった。

評定結果と考察

自己記入項目Q1の「授業内容と英語を必要とする仕事の関連を考える機会」については、1名が、「非常に強くあてはまる」、2名が「ややあてはまる」を選択した。本年度は、回答者数が少なく、この結果により授業評価を行う事は困難であるが、受講者に一定の能動的姿勢が認められたと推察する事も可能である。そして、自己記入項目Q2の「授業内容とスポーツに関わる運営/管理の仕事との関連を考える機会」については、1名が、「非常に強くあてはまる」、1名が「ややあてはまる」、1名が「まったくあてはまらない」を選んだ。この結果についても頑健な評価をすることは困難であるが、講義内容について、今後さらなる工夫が必要である事を示唆している可能性がある。

さらに自由記述項目の「授業を履修した動機」については、英語自体への興味、スポーツとの両立への関心、さらに、グローバルスポーツプログラムへの参加の為など、多数の積極的な記述が認められた。また「英語を活用できるスポーツに関わる活動について考えられるものを挙げてもらう」項目については、プロスポーツ選手のみならず、国際的なスポーツ競技における通訳、マーケティング、スカウト業務など、同様に多数の積極的記述が認められ、英語の授業のインターナショナルスポーツアドミニストレータに対する汎用性を示唆しうる結果が得られたとも考えられる。

資料7：第4回ミーティング

30年度SEI事業総括第4回ミーティングは平成30年12月17日（月曜日）に、阿部、碓井、木原、田中、麓、布川によって行われ、1)SEI事業関連の英語科目の評価について、2)SA入門シニアスタッフ回のレポート評価について、3)SA入門シニアスタッフ回の講師所感のまとめについて、4)SA入門受講生アンケートのまとめについて、5)SA入門シニアスタッフ以外の講師からのヒアリングのまとめについて、6)次年度SEI関連事業としての授業の立ち上げについて、の主として6項目について議論がなされた。

資料8：第5回ミーティング

平成30年度SEI事業総括第5回ミーティングは、平成31年1月30日（水曜日）に、阿部、碓井、木原、田中、麓、布川によって行われ、1)英語科目アンケートについて、2)英語科目でのスポーツの内容、3)SA入門成績について、4)SA入門受講生アンケートのまとめについて、5)SA入門シニアスタッフ以外の講師からのヒアリングのまとめについて、6)スポーツ・アドミニストレーションのシラバスについて、の主として5項目について議論がなされた。

資料9：第6回ミーティング

平成30年度SEI事業総括第6回ミーティングは、平成31年2月27日（水曜日）に、阿部、碓井、田中、麓、布川によって行われ、1)スポーツ・アドミニストレーション授業について、2)スポーツ・アドミニストレーション入門授業について、3)「国際スポーツ・アドミニストレーター認定」課程の科目について、4)SEI事業総括最終報告書案について、の主として4項目について議論がなされた。

資料10：事業を実施する上で、どのような部分に困難な点があり、その困難な点を解決するためのどのような方策をとったか]

本事業の報告をするに当たり、SEI 事業総括のこれまでの活動を振り返ると、初期の目標に向かってかなり効果的に実施されているものの、事業内容によっては、実施する上で多少困難な面にも遭遇した。このことから、今後の望ましい展開を考えるに当たり、以下に述べる1～3の点に（困難な点）を解決するための方策について検討した。

1. 英語科目「English comprehensionⅡ」と「Communication basic Ⅱ」（グローバルスポーツプログラム及びSEI 事業関連）の受講者数が少ない（秋学期5名）。この原因は、意欲のある2年生が受講していないこと、異なるキャンパス（第1キャンパス）でグローバルスポーツプログラムとSEI 事業関連の受講者以外の学生との合同授業になっていることがあげられる。

1、2年生対象だが、意欲のある2年生がほとんど受講できていない理由は、水曜と木曜1、2限の英語授業において、水曜2限に2年生対象の基礎演習が入っていることである。やる気のある学生のほとんどは演習に所属しており、水曜2限の英語授業を受講することができない。他方、1年生への周知にも問題があるかもしれない（履修登録期間に十分検討できていない可能性がある）。意欲のある2年生が受講できるように、英語授業の開始時間を早める、水曜授業を月曜日に移動させるなどの措置が必要である。

2. 英語授業にスポーツの内容がほとんど含まれていない。

「English comprehensionⅡ」と「Communication basic Ⅱ」の内容は、グローバルスポーツプログラムとSEI 事業関連以外の学生が受講する内容と同じであり、スポーツの内容が含まれていない。SEI 事業総括は、スポーツ力と英語力の統合を目指しているため、スポーツ科目への英語導入、英語科目へのスポーツ内容の導入は必須と思われる。このうち、英語科目へのスポーツの内容の導入については、GTI（Global Teaching Institute）の教員に相談しており、実現の方向である。

3. スポーツ科目「スポーツ・アドミニストレーション入門（受講者数100名以上）」と英語授業をともに受講している学生（4名）が少ない。これは、英語科目の受講者が少ないことが影響している。英語科目を受講している5名中4名（80%）がスポーツ科目を受講しており、割合は高い。英語科目の受講者を増やし、同時に「スポーツ・アドミニストレーション入門」を受講するように勧めることで、両者をともに受講する学生を増やすことができると考えられる。

そもそも今年度当初の英語科目を開設する時点では本事業もスタートしておらず、「スポーツ・アドミニストレーション入門」との連動は困難であったのではないかと考えられる。今後、両科目を連動しようとした際に起きる時間割、教員、内容等の様々な問題については、例えば「スポーツ・アドミニストレーション入門」の内容にも、英語を取り入れるようなカリキュラムの工夫も必要と考えられる。

(4) 今後の予定

委託事業実施計画書に示した3総括（強化クラブ総括、企画マーケティング総括、SEI 事業総括報告）の事業実施スケジュールを以下に示すが、現時点ではスケジュールに従って、ほぼ順調に進められている。より具体的な実施状況に関しては、それぞれの項目において、(※) 印にて記載した。

◎強化クラブ総括

○短期目標（1～2年次）

スポーツ医科学理論に基づいた指導による競技成績向上（資料1）

※強化クラブ総括が2018年度中に実施を予定している「傷害予防策」、「学業成績管理制度」は、この「医科学理論に基づく指導」の根幹をなす要素として考えている。そのため、本年度中の実施事業の内容は、今後のUNIVAS 施策の質を左右するという認識をしている。スポーツ競技成績の向上は、即効性をもって明確に現れるものではないが、来年度からの着実な成績向上に繋げるべく、とどまることのない施策実行を進めていく予定である。

○中期目標（2～3年次）

各所属連盟での安定した地位の確立（資料1）

※強化クラブ発足後数年間は、各所属連盟内での順位向上は見られた。しかし、上位進出を安定して継続するに至っていない。そのレベルには、現場経験者の経験則だけで可能であった。しかし大学スポーツの国内トップの地位を築くためには、今後は大学という高い知識・技能を有する専門家の能力を最大限に生かすことが必須であると判断している。

○長期目標（3～4年次）

各所属連盟を超えて国内学生スポーツ界における立ち位置の確立（資料1）

※全国大会での上位進出を達成することは、単に本学の利益にとどまらず、国内の大学スポーツの先導的な役割を担うことによって、「スポーツを謳う大学」としての価値があると考えている。また、選手個人としてのレベルだけではなく、組織レベルでも本学が大学スポーツ界における一つの発展的モデルとして位置づけられるように努力を重ねていく所存である。

○初年度内短期目標の評価と振り返り（資料4）

- ・〔～2ヶ月（6～7月）〕 目標と評価

各部の創設（組織メンバーの選定、連携体制の構築）

※既に実施中（順調に推移）

- ・〔～6ヶ月（8～11）〕 目標と評価

課題の認識と施策立案（組織メンバー役割分担の確認、各強化クラブの現状把握、緊急時対応計画実施、障害予防策の検討、学業成績管理体制の検討）

※既に実施中（順調に推移）

- ・〔～10ヶ月（12～翌年3月）〕 目標と評価

傷害予防策導入・指導者の再教育、学業管理体制の検討（到達必須成績管理基準検討）

※今後実施予定

・〔最終月（～12ヶ月）〕での振り返り

・部の総括と連携、・スポーツ推進部における総括、・次年度へ向けての検討

※今後実施予定

◎企画マーケティング総括

○短期目標（1～2年次）

各競技における収益性の調査と、それに基づく企画運営、競技認知度向上（資料2）

※各強化クラブは、その特徴を生かしたイベント(案)を提出しているが、初年次に実施できるのは、2～3のクラブとなる。

○中期目標（2～3年次）

各連盟公式試合のイベント化（資料2）

※今後実施予定

○長期目標（3～4年次）

日本版NCAA（UNIVAS）との協力関係強化による、大学スポーツのビジネスモデル化（資料2）

※今後実施予定

○初年度内短期目標の評価と振り返り（資料4）

・〔～2ヶ月（6～7月）〕目標と評価

各部の創設（組織メンバーの選定と役割分担の確認、連携体制の構築）

※既に実施中（順調に推移）

・〔～6ヶ月（8～11月）〕目標と評価

組織整備とイベントの準備（強化クラブ財務状況管理、強化クラブの内部資源、外部環境、ステークホルダーのニーズ把握、連携体制の構築）

※強化クラブの内部資源、外部環境の把握に関しては実施中（順調に推移）であるが、その他は今後実施予定

・〔～10ヶ月（12～翌年3月）〕目標と評価

対外イベントの企画立案、実施そして評価（対外イベント実施のためのマーケティングミックス“企画立案”の作成、実施、評価）

※今後実施予定

・〔最終月（～12ヶ月）〕での振り返り

イベントの実施と評価、・次年度へ向けての課題の検討

※今後実施予定

◎SEI 事業総括

○短期目標（1～2年次）

スポーツ力と英語力の充実とその統合に関連した評価（資料3）

※スポーツ力と英語力のそれぞれに関してはほぼ充実しているが、それが統合された形で充実するには、現在の授業形態や時間割を改善するなど、もう暫く時間がかかりそうで

ある。

○中期目標（2～3年次）

国際スポーツ大会へのボランティア参加に関連した評価（資料3）

※中期目標については、短期目標の成果を受けた次段階と位置づけられる。SEI 事業総括関連のスポーツ科目と英語科目の学生およびスタッフの評価などをふまえて、授業改善計画の策定と並行して計画し、実現に向けて関係部署との調整を進める予定である。

○長期目標（3～4年次）

地域スポーツ大会の企画・運営に参加した評価（資料3）

※長期目標は中期事業の次段階と位置づけられる。しかし、本年度の企画マーケティング総括の事業と連携して行うことが予想されるため、企画マーケティング総括の動向を踏まえ、必要に応じて情報集、関係部署への事前の説明などを行いながら、事前準備を進めていく予定である。

○初年度内短期目標の評価と振り返り（資料4）

・〔～2ヶ月（6～7月）〕 目標と評価

各部の創設（組織メンバーの選定と役割分担の確認、連携体制の構築）

※既に実施中（順調に推移）

・〔～6ヶ月（8～11）〕 目標と評価

ISA 育成講座立案と講座開始（ISA 育成講座の立案、検討、及び実施、学内における育成スケジュールの策定）

※既に実施中（順調に推移）

・〔～10ヶ月（12～翌年3月）〕 目標と評価

ISA 育成講座の開始（ISA 育成講座の実施と評価、地域との連携の検討）

※ISA 育成講座はすでに開始されており、順調に進んでいる。本年度の最終授業において実施予定の本事業と関連した授業評価と来年度実施に向けたアンケート作成も終了している。地域との連携については、企画マーケティング総括の事業内容（強化クラブによるイベント実施）との連携が予想されるため、情報収集と実行可能な計画作成の準備を進める予定である。

・〔最終月（～12ヶ月）〕での振り返り

部の総括（次年度へ向けての検討）

※ISA 育成講座の授業評価アンケート内容や、SEI 事業総括内のミーティング（既に2回実施）および全体ミーティングなどの内容を踏まえて実施予定である。

資料1～4

資料1 強化クラブ総括における目標と評価

短期目標 (1～2年)	中期目標 (2～3年)	長期目標 (3～4年)
<p>スポーツ医科学理論に基づいた指導による競技成績向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 指導スタッフへの医科学的理論の浸透⇒傷害発生率の評価 学業に対する意識の向上⇒学業成績基準に対する到達度評価 学生アスリートとしての根本的な意識改革⇒退部者数評価、指導力の客観的な評価 	<p>各所属連盟での安定した地位の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> 競技力向上を土台にした成績の上位進出⇒競技成績評価 各所属連盟における、体育会運動部としての先進的モデルとしての役割⇒連盟におけるリーダーシップ 就職支援の充実化⇒就職率評価 高校運動部指導者からの評価⇒アンケート調査 	<p>各所属連盟を超えて国内学生スポーツ界における立ち位置の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本版NCAAの認知度拡大への貢献 国内トップクラス選手の輩出 競技現場だけでなく、スポーツビジネス界に通用する人材の輩出

資料2 企画マーケティング統括における目標と評価

短期目標 (1～2年)	中期目標 (2～3年)	長期目標 (3～4年)
<p>各競技における収益性の調査と、それに基づく企画運営、競技認知度向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 各競技連盟との連携 プロ化されている競技団体との連携、提携 強化クラブの宣伝広告 各競技連盟公式試合の認知度拡大 有力高校選手のスカウト網拡充 	<p>各連盟公式試合のイベント化</p> <ul style="list-style-type: none"> 各競技公式試合の集客力向上⇒観客数調査 非公式試合の公開によるイベント化⇒周辺地域への告知 強化クラブ、選手による宣伝⇒宣伝効果評価 学生選手による競技指導教室⇒対象チームからの評価向上 坂戸キャンパスにおける、プロ・実業団チームに試合の開催⇒ファン層拡大 高校以下ジュニアカテゴリーの公式試合の坂戸キャンパス開催⇒TIU志望高校生の増加 	<p>日本版NCAAとの協力関係強化による、大学スポーツのビジネスモデル化</p> <ul style="list-style-type: none"> 各競技連盟の相互の交流試合開催（単発オープンゲームではなく、一週間程度のモニターナメント、二軍クラスでも良い、特に高校時代活躍した選手による集客）⇒米国NCAAとの比較 TIUのブランドとしての地位の基盤構築⇒認知度、好感度調査 日本版NCAA加盟校と非加盟校との差別化⇒加盟校に対する評価の変化の有無

資料3 SEI事業統括における 国際スポーツアドミニストレーター (ISA)育成計画目標と評価

短期目標 (1～2年次)	中期目標 (2～3年次)	長期目標 (3～4年次)
<p>スポーツ力と英語力の充実とその統合に関連した評価</p> <ul style="list-style-type: none"> SEI事業統括が開催する講座の開催数、参加者数等 講座への参加者による講座内容に関する評価 スポーツ英語能力認定課程についての開発を始める。 	<p>国際スポーツ大会へのボランティア参加に関連した評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ボランティアへの参加回数、参加日数等 外部団体のボランティアに対する評価 スポーツ英語能力認定課程についての開発を継続する。 	<p>地域スポーツ大会の企画・運営に参加した評価</p> <ul style="list-style-type: none"> スポーツ大会の主催者の評価 スポーツ大会参加者（参加者数、参加者のアンケート調査）に関する評価 外部の客観的な英語力試験（TOEIC等）とスポーツ能力認定課程の比較・検証を経て、スポーツ英語能力認定課程の完成を目指す。

資料4 事業実施計画に沿った各部門の目標と評価（初年度）

	目標と評価 (～2ヶ月) 6-7月	目標と評価 (～6ヶ月) 8-11月	目標と評価 (～10ヶ月) 12-3月	振り返り (～12ヶ月)
強化クラブ 総括	<p>各部の創設</p> <ul style="list-style-type: none"> 組織メンバーの選定 連携体制の構築 	<p>課題の認識と施策立案</p> <ul style="list-style-type: none"> 組織メンバー役割分担の確認 各強化クラブの現状把握 緊急時対応計画実施 障害予防策の検討 学業成績管理体制の検討 	<p>傷害予防策導入・指導者の再教育 学業管理体制の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> 到達必須成績管理基準検討 	<ul style="list-style-type: none"> 部の総括と連携 スポーツ推進部における総括 次年度へ向けての検討
企画マーケティング 統括	<p>各部の創設</p> <ul style="list-style-type: none"> 組織メンバーの選定と役割分担の確認 連携体制の構築 	<p>組織整備とイベントの準備</p> <ul style="list-style-type: none"> 強化クラブ財務状況管理 強化クラブの内部資源、外部環境、ステークホルダーのニーズ把握 	<p>対外イベントの企画立案、実施として評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 対外イベント実施のためのマーケティングミックス（企画立案）の作成、実施、評価 	<ul style="list-style-type: none"> イベントの実施と評価 次年度へ向けての課題の検討
SEI 事業統括	<p>各部の創設</p> <ul style="list-style-type: none"> 組織メンバーの選定と役割分担の確認 連携体制の構築 	<p>ISA育成講座立案と講座開始</p> <ul style="list-style-type: none"> ISA育成講座の立案、検討、及び実施 学内における育成スケジュールの策定 	<p>ISA育成講座の開始</p> <ul style="list-style-type: none"> ISA育成講座の実施と評価 地域との連携の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 部の総括 次年度へ向けての検討

(5) その他

実施しないこととなった事業は、基本的にはありません。

2019年3月10日

アメリカ視察報告

東京国際大学 硬式庭球部
監督 佐藤 直子

私は2019年2月26日～3月2日の間にIMGアカデミー、USTA National Campus、サドルブルックテニスアカデミーを視察し、その間にNCAAを体験した元選手、NCAAのディビジョン1に選手を送り込むことを仕事としている専門家達にインタビューをして、NCAAのなんたるかを理解し、日本へのそのシステムの移行についての考えをまとめた。

米国における大学スポーツ全体のルール等を統括する組織として発足したのがNCAA (National Collegiate Athletic Association 全米大学体育協会) である。

その歴史的背景としては、1852年ハーバード大学とイエール大学のボート部のレースが開催され、大学間のスポーツ競技の競争によって多くの観客が集まり、大学のマーケティング、宣伝等のビジネスに役立つということが立証された。そして大学ごとの教授による組織委員会などで大学スポーツが運営されていたものの、規模の拡大と共に怪我人や競技中の死亡事故などもあり、全体のルール改正など、統括する組織が必要となり1906年にThe Intercollegiate Athletic Association of United Statesが設立され、1910年に改名されてNCAAとなった。

1915年にはピッツバーグ大学が試合観戦のチケットを初めて有料化した。

1920年代大学スポーツの人気により入学者数の増加が見込まれ、スタジアムの建設、コーチの招聘、スポーツ施設や人的リソースの充実を図り始めた。

1952年NCAAが放送局と大学フットボールの放映権の契約を締結。

その後現在に至るが、拡大の一途をたどる大学スポーツはスポーツの持つアマチュアリズム、学業との両立、男女や幅広い人種などへの均等な機会創出など、様々な課題を抱えることになった。(田丸尚稔氏がまとめた資料より)

ここまでは、誰もがインターネットなどで調べることのできる知識である。

今回、私がIMGアカデミー、USTA ナショナルキャンパス、サドルブルックテニスアカデミーの視察において自分の目で見て、専門家と会って得た知識、そして感じたことをここに報告します。フロリダ州立大学の卒業生でありAthletic Departmentの組織に詳しいIMGアカデミーの募集担当者、USTA ナショナルキャンパスの元職員で現在NCAAへテニスの上手い高校生を送り込む仕事をしている会社のDirectorに聞いた情報は、私のNCAAの知識を深めることにとっても役立ちました。

NCAAは大学スポーツの統括機関として、運営ルールの管理を行っている。基本的なコンセプトとして、あくまで学生であることを本分に、スポーツ教育を通じて人間形成を行うことを第一としている。入学時、在学時の学業とスポーツの機会のルール作り、怪我を予防するための練習量やシーズン制などの検討、学生リクルートの規定

などを行っている。それらのルールがあまりに厳しく、NCAA を抜きたいと考えている大学もある。(練習量が1週間20時間《ジムトレも含む》、週一日完全な休み。リクルートしたい高校生に週1回しか電話をしてはならない。選手を移動させるバンをコーチが運転してはならないなど。)
「バランスある人生を過ごすために NCAA がある。」と NCAA 言っているが…。

この他、テレビ放映権を中心とした、大学スポーツのライセンス管理なども行い、また大学に対する収入の配分なども管理している。しかしながら、これらの収益はほとんどがアメリカンフットボールからであり、アメリカンフットボールが盛んではない日本では収入源はないのでは?と言われた。

それぞれのアメリカの大学内には「アスレティック・デパートメント」と呼ばれる、日本では考えられないほど大きなスポーツ運営組織が設置されている。アスレティック・ディレクターのもと、各スポーツのヘッドコーチ、オペレーションスタッフ、施設運営(練習・大会運営・チケット販売)、ギア・プロダクトマネージメント、マーケティング、メディアオペレーション、各種スポーツコーチ+オペレーションスタッフ、スチューデントサービス(スポーツと学業の両立を計るアドバイザー。大学が選手を失いたくないので「マンドトリースタディーホール」という成績の悪い生徒を強制的に勉強させるホールも設置されている。)、経理(遠征などの予算管理)、パフォーマンススタッフ(トレーニングなどのエキスパート管理)、ファンオペレーション(大会や各種イベント、メディアでのファン獲得)、寄付金の管理・運用(卒業生のネットワーク構築、資金運用) etc.

があり、アメリカンフットボールほどの集客、集金が可能なキラークンテンツがない日本で、この大きな組織を作ることが重荷になる可能性がある。

IMG アカデミー(東京ドーム 50 個分の広さ)

文武両道・社会性・人間性・地域制 その4つを IMG は重要なポイントとしている。

そして、スポーツを通じた教育がこれらを担うことができると IMG は信じている。日本ではなぜかスポーツは勝ち負けだけを重視している気がする。

アスリートは実はスマート(頭脳明晰)である。

アメリカでは Student Athletes は勉強もできて尊敬される存在である。特待生ではなく、スポーツバカでもない。

NCAA の大学はスポーツでも競い合っているが、学業の成績も競い合っている。

*シングルの練習試合をさせるときに、それぞれの国の小さな旗を持たせて、勝つと相手の旗を貰えることにしていた時代があった。自分の国を代表してプレーしている意識、誇りを子供たちに植え付けたかった。今でも IMG アカデミー生のゴルフバッグにはそれぞれの国旗を付けている。

*怪我をさせないことを大切にしている。一回怪我をさせると3か月休ませなくてはならない。(日本からの留学生は朝7時からプライベートレッスン1時間、その後エリートクラスのレッスン2時間、試合1試合したあと、約1時間のトレーニングスタッフの指導によるストレッチを芝生の上で行った。そしてその後、トレーニングヘッドコーチの指導をジムで受け《テニスコーチも一緒》、再びテニスコートへ移動して約1時間テニスコーチとトレーニングコーチの指導の下、テニスボールを打った。トレーナーに正しい体の動きを習い、そのままコートに出てその動きをプレーに活かしたことに、私は感動を覚えた。そしてその後再びストレッチとセルフマッサージを行った。「怪我をさせない」の徹底を感じた。ちなみに、その留学生も当然 IMG アカデミーでは単にテニスのト

レーニングだけでなく、アメリカの学校にも通い、また日本の通信教育も受けている。

IMG アカデミーの中には病院も入っていた。NCAA の大学では、Mental Health という部署もあり、身体の怪我だけでなく、心のケアにも注意を払っている。

*盛田ファンドの日本人留学生が受けたプライベートレッスンで、サーブ練習の時にコーチがボールをゆっくり投げて、それを日本人留学生が受け取って相手コートを睨んでサーブする。その繰り返しだった。沢山ボールを打たせたい私の焦り気味の練習方法に比べて、とてもゆったりしたものであった。そのことを IMG アカデミーの募集担当者に話すと「うちはゴルフでも、カーペットの上で打たせることはしません。必ず試合と同じ天然芝の上で、まず距離を測り、風を感じて、クラブを選び、そして打つ。試合と同じリズムで打たせるようにしています。」と言われた。

5, 6年前に、「なぜ韓国のゴルフは強いのか。日本との違い」という記事で、日本人が1日に600球打つとしたら、韓国のジュニア選手は1200球打つ。という話を知ったが、IMG では量より質を重視している。

*IMG アカデミーに「MIND GYM」というのがあったのは印象的だった。この言葉は初めて耳にした。そこには、大きな盤のいろいろなところに光が出て、それを手で触るという、良くある目のトレーニング機械などがあったが、奥のテーブルで7, 8名の選手が積み木のようなものを、コーチに指定された形に並べて積み上げるという動作をしていた。そして、途中からストレスを与えるためにチームを半分に分けて競争させることを始めた。選手は「もう、ギャーっていいくなるよお」という、ストレスを高めてその中でもできるだけ心を落ち着けてやるべきことをやる訓練だった。私はそのようなことをしたことがなかったので、とても面白かった。週1で例えば錦織圭選手もそのマインドジムでトレーニングを受けるそうだ。

*IMG アカデミーのカフェテリアにはバランスよく栄養を摂取するように円形グラフで示されていて、ベストパフォーマンスのための食料の取り方と、ウエイトマネージメントをしている時の食料の取り方など、プロテイン、炭水化物、その他のミネラルなどが円形グラフで色別になっていて、食料の所にその色で識別できるようになっていた。

*IMG アカデミーの寮、またはスポーツ選手が休む場には無駄なように見えるが広いスペースを取っていて(談話室、ビーチバレー場など)、このスペースが意外と違うスポーツの選手と友達になったり語り合ったりする場所となっていて、選手達のストレス、ホームシックを和らげる役を担っているそうだ。

*Teach for America というアメリカの大学生がこぞって入りたい2年のプログラムがある。勉強の遅れている地域へ行って子供たちを教えて、自分の人間性を伸ばすシステム。大学を卒業して2年なのでそれが終わると24歳になるが、企業はその学生を取りたがる。日本にも Teach for JAPAN を作るのはいかがでしょうか。スポーツでも応用できる。

「テニスの世界では、プロを目指して人生のほとんどの時間をテニス練習に当て、勉強、社会性、人間性を無視して世界ランキングを上げることに努めるジュニア選手もいる。しかし、彼らが25歳、26歳ぐらいになって世界ランキングが思ったほど上がらず、テニスを諦めて自分の町に帰っても友達もなく、仕事もなく、困り果てることになる。」そういった問題をオーストラリアンオープン中のオーストラリア・ラスト8クラブの総会で提示したのはジョン・ニューカム(オーストラリアのレジェンド)であった。

アメリカでは、多くの若者がそういった問題に気付いており、プロ選手になるよりもNCAAのディビジョン1で活躍し、勉強も沢山して、友達も沢山作り、優良企業に入って人生を成功させることを夢見ている。こう私に感じさせてくれたのは、今回特にNCAAの専門家として話を伺ったIMGアカデミーの募集担当者の方と、USTAナショ

ナルキャンパスの元職員の方であった。

アメリカでは、スポーツ教育のすべての基点が大学である。今回の IMG アカデミー、USTA ナショナルキャンパス、サドルブルックテニスアカデミー視察を通して、大学内の健全化、指導者の人材輩出の役割も含めて、日本の大学スポーツの指導者として、大きな責任があることを実感した。

以上

2019年3月10日

アメリカ視察報告

東京国際大学 国際交流課
篠原 茂

2019年2月26日～3月3日の日程で、米国フロリダ州のスポーツアカデミー2箇所（IMG Academy と Saddlebrook Academy）及び、全米テニス協会ナショナルキャンプを訪問した。特に今回 IMG Academy の視察に多くの時間を割いた。IMG といえば日本では錦織圭選手の出身アカデミーとして有名だが、テニスの他にアメフト、ゴルフ、バスケットボール、野球、サッカー、ラクロス、そして陸上と8種のスポーツプログラムを展開している。スポーツ養成所の印象が強いが、本質的にはその名の通り「学校」であり、東京ドーム50個分の広大な敷地内には各競技のトレーニング施設は勿論、小学校から高校までの学校、そしてモダン且つ機能的な宿舎が完備されており、学生達は午前と午後で授業とトレーニングが交互に組まれた生活をおくっている。ここで暮らす12歳から19歳の学生約1200人のおよそ半数は80カ国以上から集まった長期留学生である。アカデミーを卒業して直接プロ選手になるのは1～2%程度で、大半の学生は大学進学、中でも米国大学スポーツの花形である Division-1 カテゴリーへの奨学金付帯の進学を目指している。

以下、いくつか印象に残ったことを記す。

【学業との両立】

米国の大学にスポーツ選手として入学するには NCAA の定める Eligibility 基準を満たす必要があり、成績や出席日数、留学生であれば語学スコアなどが評価対象となる。Division-1 では最も高い学業要件が求められる。IMG でも成績の下がった学生はトレーニングを受けられないため、学生は練習に参加したいから勉強も手を抜かない、という好循環が構築されている。大学入学後も授業への出席日数や成績など基準に満たない場合は練習や試合へ

の参加が認められないなど、学業との両立が厳しく求められている。アカデミーにも各大学のスポーツ統括部門（Athletic Department）にも必ず学業面のサポートスタッフが配置されているのも特徴的だ。

【ケガの防止と身体管理】

1910年 NCAA 設立のきっかけとなったのも当時競技中の死亡事故やケガが多発したことが背景にあり、学生をケガから守る意識は非常に強いものを感じた。スポーツアカデミーは勿論、各大学のスポーツ統括部門にも Health & Safety の担当者がいて、学生のケガ防止と健康管理に努めている。今回の視察でもトレーニングメニューの中でストレッチに多くの時間を充てているのが印象的だった。特に、体が成長過程にあるアカデミーのジュニア世代においては、学生一人ひとりの成長を見極めた上でのトレーニングやストレッチを指導することで、ケガの防止だけでなく、個人の身体能力を引き出すことにも役立っているようだ。また、学生には栄養学を受講させ、カフェテリアではメニュー毎の栄養価を表示するなど、自身の身体管理への意識付けを行っている。

【ジュニア世代と大学世代】

今回視察したスポーツアカデミーは大学進学前のいわばジュニア世代を育てているわけだが、学生アスリート育成の理念はジュニアから大学まで一貫しており、それが米国の大学スポーツ、ひいては NFL や NBA、MLB などスポーツ王国としての繁栄の基礎になっているように感じた。米国ではアスリートは「スマートで尊敬される存在」であり、Division-1 の大学からはプロ選手だけでなく社会で活躍できる高い人間性を備えた人材が輩出されている。これは大学スポーツ界だけで成し得たものではなく、ジュニア世代からの一貫した指導育成によって成り立っている。

【地域性】

米国の大学スポーツ界では地域性も重視しており、地元の子供達とのイベントや試合後のフィールドでの交流など、地元ファンを増やす努力をしている。大学スポーツ部門の収益の中で「寄付金」が大きなウェイトを占めることにも寄与していると推察される。日本でもプロ野球や J リーグでは地域性を重視して成功しているチームがあるが、大学スポーツではまだ地域にアピールしている例は多くない。「幼少期の Engagement は一生継続する」と米国では言われているようで、地域の活性化のみならず、上述したジュニア世代から大学世代と続くアスリート育成に向け、子供達に「学生アスリートへの憧れ」を植え付ける効果も期待できる。

【人材】

今回 IMG で面会した日本人スタッフのお二人は、米国の大学でスポーツマネジメントやスポーツサイエンスを学び、現在はスポーツアカデミー世界最大手である IMG でそれぞれ部門を任されている。スポーツへの信念と情熱、そして豊富な知識を持ってジュニアの育成やトップアスリートのサポートにあたる姿は自信に満ち溢れていた。一方日本の特にアマチュアスポーツ界では、経営的観点や科学的観点からの専門性はまだそれほど認知されておらず、チーム運営は OB や元選手が担っているケースが多い。今後日本の大学も実技だけではなく教養としてのスポーツ関連教育をより発展させると共に、米国で専門性を身につけた人材を活用するポストが日本のスポーツ界や教育現場にも必要だと感じた。

以上